

松井耕雪翁傳

松井耕雪翁傳



例言

- 一 本書は武生町の偉人松井耕雪翁の五十年忌記念事業として、建學碑設立と相待つて之を編輯し、武生町其他の有志者に頒布するを以て其目的とす。
- 二 本書は翁の嗣子歿後祀事を奉ずる者なく、資料頗る散佚したるを以て、寥々たる斷簡零墨に據り且僅々月餘の日數にて編輯したる者なれば、固より杜撰の譏を免れざるなり。
- 三 本書編輯に際し、各地の縁故者より資料遺墨等を示され、又編輯同人が資料の蒐集謄寫の補助に努められたることを茲に感謝す。

昭和九年七月

編輯主任 石橋 重吉

目次

一	翁の閑歴	一
二	藩覺立教館	三
三	別墅逍遙園	六
四	翁の造詣と藏書	三
五	翁の公的生活	三
六	翁晩年の交遊	六
七	翁の作品	五
八	翁の落款	五
九	翁についての追懷談	六
一〇	耕雪翁年譜	八〇

附録

耕雪翁詩文鈔	八三
--------	----



松井耕雪翁肖像
明治三十年攝影時年三十六

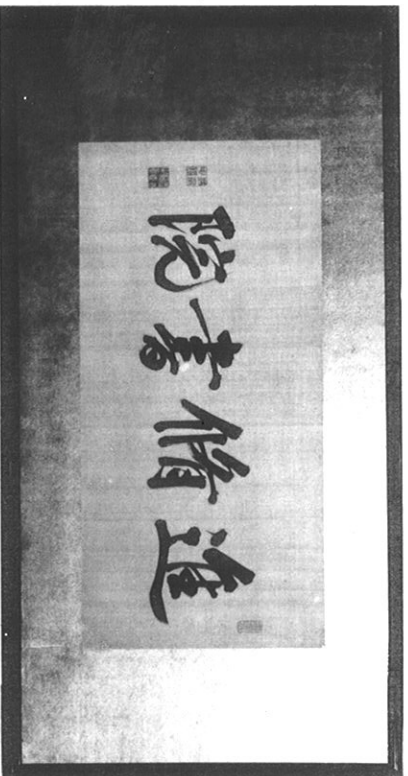
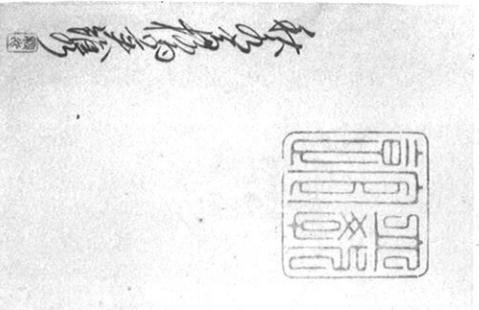


安政三年教授竹内龍齋書

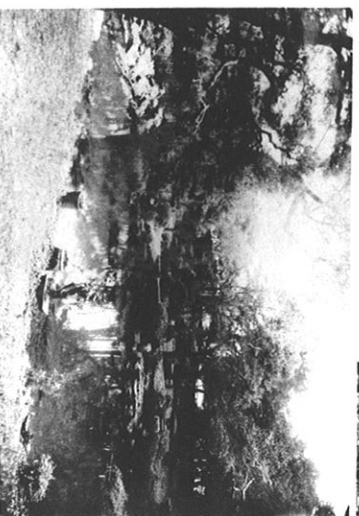
府中藩農立教館額



立教館印



同上松平恭嶺公書



此卷乃余之書也
 中平之腹又臨虛室
 其有居於此者必
 富而後知其意也
 辛未夏初日
 松平慶永



畫帖耕雪翁筆

大正十三年十一月
 八日賜台覽

書東松平春嶽公手書

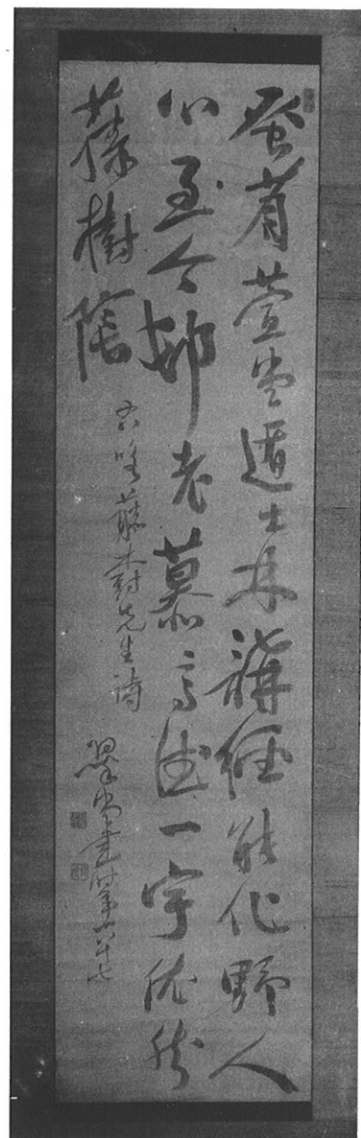
松平春嶽公手書
 此卷乃余之書也
 中平之腹又臨虛室
 其有居於此者必
 富而後知其意也
 辛未夏初日
 松平慶永

東京高木道子女士書地
 西京松平慶永
 松平篤友
 二月廿五日

詩集稿本七卷
耕雪翁筆



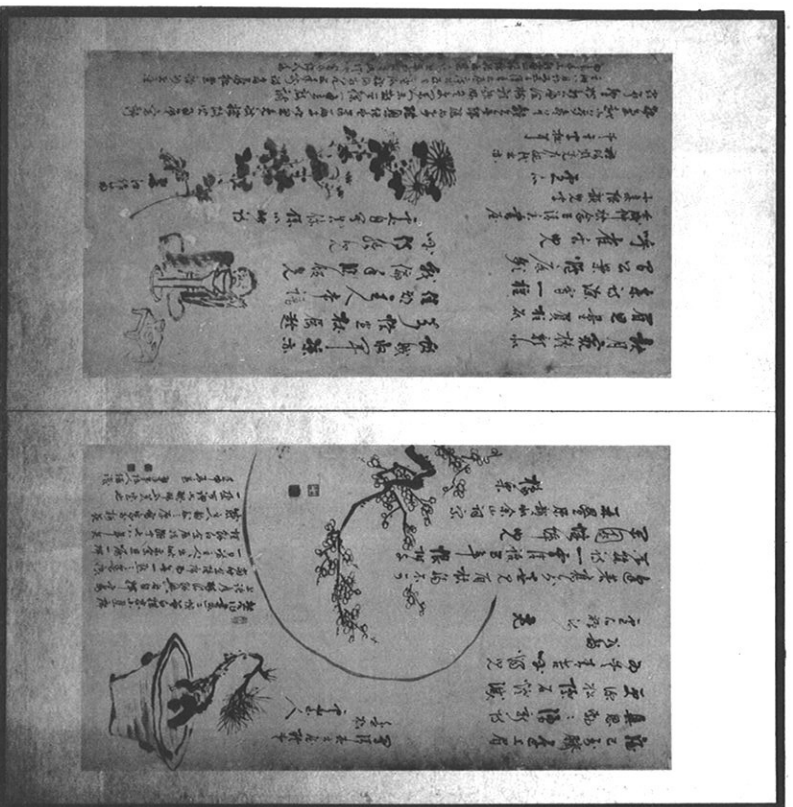
七絶 耕雪翁遺墨



和歌に竹石圖

明治十年秋日春嶽公京都の耕
 雪翁寓居に來臨公翁の合作

等山余爪雪雪排風屏折放二作合畫書



環遊霜雪排畫水山

松井耕雪翁傳

一 翁の閱歷

古來越前國府の舊址として、打刃物の產地として、世に隠れもない今の武生町に、藩政時代は姑く置き、明治維新後に關義臣の如き、渡邊洪基・同悌二郎の如き、齋藤修一郎の如き、栗塚省吾の如き、中島又五郎の如き、松本源太郎の如き、土肥慶藏の如き幾多の異才が彬々として輩出した。これが教養の素地を作つた者は何人であらうか、吾人は先づ指を鎌の一商人から身を起して藩費立教館を建設した松井耕雪翁に屈せねばならぬ。されど、此隠れたる功績者は、星移り物換つた今日、漸く世人から忘却されんとしてゐるのは甚だ遺憾の事である。今茲昭和九年五月は、翁の歿後五十年忌に相當するので、父老胥謀つて建學記念碑を建設し傳記を編輯して翁の遺徳を顯彰されることは、誠に郷土偉人に對する美舉といはねばならぬ。

翁名は篤、字は子行、通稱六右衛門、耕雪・翠堂・雙峯處士・蘆山樵隱・芋栗山人等の號あり、文政二年三月十三日、今の武生町蓬萊區（元大黒町西側上から三軒目）八世松井六右衛門の嗣子として呱呱の聲をあげられた。松井家は開祖六右衛門から二百數十年繼續してきた舊府中の著姓で、打刃物を家業とし、翁は

其九世に當る。十一歳にして實父、二十四歳にして祖父と繼父を喪ひ、二十五歳にして實母を喪ひ、悲嘆の中に家督を相續された。翁が書殘された故紙類を調べると

不肖 篤沐手百拜頓首。謹奉_レ獻_レ誓言於_二先考本門院隆開日顯尊靈牌前_一焉。謹回_二思廿七年前_一則 篤年甫十一矣。漸識_二水火東西之分異_一。當_レ欲_レ報_二罔極之恩_一時。皇天不_レ假_二壽於慈父_一而終長逝矣。則 今月今日也。嗚呼。不_レ啻慈父之不幸。而 篤之不幸亦莫_レ大_レ焉。(中略) 篤不肖自錄_二三所_一戒而備_二之先考靈前_一。從_二今日_一終身戒慎欲_二以奉_レ慰_二嚴君一時之神慮_一。

其一曰。道_二人之短_一。說_二己之長_一。其二曰。形_二人之醜_一。蔽_二己之過_一。其三曰。譏_二笑人憂_一。驕_二伐己倖_一。

篤不肖庶幾此三件之戒慎。生涯當_二必銘_二心魂_一而片時不_レ怠也。若一日有_二怠慢_一。願速受_二嚴君之神譴_一而已。篤誠恐誠惶。頓首百拜。敬白。

時

安政乙卯九月廿五日

これは、翁が三十七歳の時、先考二十七回忌に當り牌前に告げられた誓詞で、一枚の唐紙に謹書してある、いかに翁が追孝の精神と自己修養に留意されたかを知ることができる。

翁は鎌屋の倅に似合はぬ程、少壯から學問を嗜み、最も詩畫を善くした。當時は藩費さへもなかつ

た不振の時代に、翁の如き町人が、いかにして修學されたか、遺稿・記錄又墓碑文にも師承の事が記述してないが、翁の先代五世・六世・七世は非常な藏書家であり、又八世の祖父は翁二十四歳まで長命されたので見ると、翁が先代家學の力に負ふところがあるのではないか、又其年代から推すと、當時府中の儒者、後の藩費立教館教授であつた沖薊齋(松永其平隱居改名)・竹内確齋(通稱四郎左衛門)などに師事されたかも知れぬ。其藏書や造詣から考へても、翁は一介の村夫子にあらずして、優に専門學者の壘を摩する資格があり、幕末の舊府中が生んだ町人中最も稀觀の俊才であつた。

翁はたゞ財と學とを以て舊府中に雄たるのみならず、亦好んで四方の名流と交遊された。福井藩にあつては、村田氏壽・毛受鹿之助・由利公正・中根雪江・松平正直等の如き、藩外にあつては、山中靜逸・鴻雪爪・廣瀬旭莊・行徳玉江・横井小楠・石津灌園・小原鐵心・内山隆佐・吉田拙藏等の如き、いづれも皆當代録々たる人物である、或は經世理財を以て往來し、或は詩酒徵逐された、其邊の消息は翁が詩文・書簡などで今日これを知ることができる。就中福井藩主松平春嶽公の知遇を受けて、其經綸を翼賛し、公も亦寓居に來訪せられ、數々手簡及物を賜はつたことは、町人たる翁の光榮此上なきことである。翁は經世理財の才に長じ、幕末から維新にかけて國產の輸出奨勵に貢獻された功績は、横井小楠・由利公正などと共に越前産業史に忘るべからざる人物である。

翁が一生中最も傳ふべき事業は、私財三百兩を獻じて藩費立教館を建設し、又良師を推舉して地方

の教學を振興せしめたことで、維新後舊府中から輩出した濟々たる多士は、直接に間接に藩黌立教館又は翁の指導に頼らぬものはない。かの政界の大立物であつた杉田鴎山の如きも、其十六歳（慶應二年）の少年の時、福井藩物産總會所で父仙十郎と同勤してゐた翁の門に入り、一年程主として資治通鑑を學んだことがある。

翁は齡四十（安政五年）で家督を嗣子仙之助（又專之助）に譲り、別墅逍遙園を築いて諸名士を延き、林泉の間に文墨の遊をし、出でゝは福井・府中の殖産興業に盡力されたが、廢藩後は足羽・敦賀兩縣に出仕し、明治九年八月敦賀縣廢止によりて退官し、爾來京都に卜居して、暫く府の修史に従事し、致仕後は全く優游自適して晩年を送られ、同十八年五月十二日卯下刻、疾を以て鳩居堂別業寸碧樓（松平春嶽公筆）に歿せられ、越えて三日本門法華宗本能寺に葬つた。享年六十七、子女凡十二人、詩文遺稿七卷あつた。翁の墓銘に據ると、翁の疾革るや舊藩主松平春嶽老公及舊領主本多副元君には東京から直に手書及物を賜うて慰問された。老公の書中に

卿昔吾舊國ニ偉績アリ、何ゾ嘗テ一日モ之ヲ忘レン、願フニ百事滄桑、今ニ尙未ダ報イズ云々。

と歎惜された。翁は病床にて其書を捧げて感泣し、枕上に侍する妻子故舊皆首を仰ぐ者がなかつたといふ。惜しいかな、今手書の所藏者不明であるが、此一事を以ても翁がいかに兩藩の公事に力を竭されたかを推知することができる。

鳩居堂主人熊谷氏は翁と久しく親交があつたので、翁の生前死後共款待され、今に至つて數十年懇情猶衰へぬといふ。明治十四年（？）十二月二十六日附翁が在武生の嗣子仙之助に與へられた通信によると、鳩居堂別業に引移られた當時の情狀がよく判る。

時下追日寒冷相増候。扱又歲月押逼、嘸多忙存候。當方にも去る十八日寺町鳩居堂別業を引移りて後、先づ落着安心は致候得共、元來^{老人}丈之積りに間取致候處へ、泰^{三男泰}・謙^{四男謙}並牧小兒等都合六七人も押込居候故、每晚窮屈には困り入居候。乍併、謙三郎^{明治四年十一歳の時、山中信天翁の養子となる、翁は嵯峨に居住す。}は明二十七日嵯峨へ差遣候様致候間、先づ一人減じ候へば少しは緩く相成候得共、迎も當家は二人より餘計には居る事出来不^レ申候、家主にも其積にて初發より心組の建築に候間無理は無^レ之候云々。
明治壬午（十五年）新年作に

吾身不^レ繫似^二漁艫^一 七歳三遷在上邦 窮臘移^レ居房未^レ暖 新年新月照^二新窓^一
とあるから、別業引移は其前年の歳末と思はれる。翁は此隱宅に數年間一擔の琴書に風月を友とし、遂に亦終焉の地となつた。

翁は天資恬淡、慈善を好み、夙に家政は嗣子及番頭に一任して、維新前後から公事に奔走し、福井に敦賀に京都に移居されたが、晩年に至り故郷の家運は漸く衰へ、嗣子から家政整理を相談すると、恬淡の翁は京都から

元來此方には明治元年より其地を離れ福井表へ罷越候節、既に一家之事は專之助家名を相續し、彌平には萬端委任致置候事に付、何れに相成候共其節より天命に任せ候事に決心致居候。依而一昨年頃より追々改革一件申來候得共、最早十四五年も本宅之事に不關候故、今更何之相談と申候共致方無之、且又此方は明治元年より當てに不致候事故、今日も此世になき人と思ひ其元限り相談致し可然なり云々。

と一書を送り、且懇々自給經濟の方法を示されたが、其後家運挽回せず、かてゝ加へて不幸續出、翁の夫人及三男・四男・六男共皆翁が歿した其前後に歿し、女子も六人中一人他に嫁いだ外皆夭死し、子孫亦東西に離散し、嗣子にも相續者なく、終に祀事を奉ずる者なきに至つたことは、翁の如き人物にして誠に惜しみて猶餘あり。今傳記編輯についても其資料散佚して取纏め難きにつき、左に碑文を掲げて翁の閱歷に代へることにした。

耕雪松井翁墓銘 在京都本能寺

君諱篤。字子行。通稱六右衛門。家世居于越前南條郡武生邑。業鏗器賈。爲邑之著姓。考諱惟孝。通稱六右衛門。妣松井氏。君其長子也。既長承家。性嗜文藝。博涉群書。最能詩畫。交道極廣。居恒慷慨國內文教之衰。以扶持振作爲志。至安政三年。遂稟准邑主本多侯。拋家貲累百金。私建營一庠於邑內。名曰立教館。倡導士庶。俾皆就學。而其凡百經畫率皆成於君獨力。後舉館獻邑主以資其風教焉。君既達素志。於是將自優游。乃傳家其長子。自此

自稱耕雪。栖息其別墅逍遙園。園在邑之巽位。故又有東南別莊之名。水木清華。以勝概聞於四方。後又奉全莊于邑主。以供其燕游焉。先是自立教館之建。遠近士庶。翕然輻湊。絃誦洋洋。一時稱盛。厥後雖隨世沿革。然昭代中興已來。邑人之著顯于朝野。以才以術各濟世用者。究其淵源則往々出于館之群秀。世是以益多君濫觴之力焉。君既興鄉學。又常以殖國產爲意。邑主頗知其材可用。嘗擢爲府中町役所總代。使兼幹制產役所事。待以士格。文久中。福井老侯春嶽公。將更張藩政。會聞肥後人橫井沼山之材。聘爲客卿。延訪富強諸策。而使其使命館伴之任。終始委之君。君亦傾意親炙沼山。孜孜贊成其績。由此又爲公所知。眷注漸渥。及戊辰維新之後。公乃召君爲封內總會所總代。君因移寓福井。遂仕藩廳。後歷官福井敦賀二縣。並累進其權大屬。及敦賀縣撤乃罷。丁丑之春。廳然游吾西京。京中多舊識。皆手額牽留。君遂寓焉。是歲十月。備仕京都府。編輯府史。庚辰一月。以疾辭。自是不復仕。翰墨自娛。鳩居堂熊谷氏者與君有世交。至今之主人直行。益相熟。堂主有支房。咫尺其居宅。及君罷官。掃室以迎君。乃欣然移居。居數歲獲重疾。終以明治十八年五月十二日。歿於熊谷氏支房。距生文政二年。享年六十有七。越三日。茶毘于京郊。收骨葬于都下本能寺之新塋。法諡曰本有院耕雪日篤居士。凡其經紀出直行之襄辦者居多焉。君早娶八木氏。生男女十二人。往々先天。其存者四男。長僊之助即嗣子也。次泰次郎。嘗仕于邑主本多侯。監守立教館。次某。

次某。一女適某。君爲人忠信慈和。虛己下人。愛材恤窮。其出處語默。常怡然自得。雖家人狎客。未嘗見其忿怒。衆無不服其雅量焉。君之疾革也。子弟馳書白之舊主正二位春嶽公及從五位本多君子東京以謝平昔之知遇。兩主爲之投箸歎惜。並賜手書及物慰問之。有卿昔有偉績于吾舊國何嘗一日而忘之顧百事滄桑于今尙未報之語。君捧書而泣。妻子故舊之擁枕者皆泣。既而友人石津發亦聞而泣曰。嗟乎一言之賜。君其可以瞑矣。以此爲銘。孰若其不朽。雖然有遺囑焉。發豈敢弗從。乃敍而銘之。銘曰。

克以布衣。愛國如家。何用扶衰。維彼菁莪。既獻芹曝。乃製芰荷。

卜洛弛擔。寄蹤煙霞。嚬々鬚髯。神耶僊耶。神仙不死。胡逝之俄。

生去桑梓。葬天一涯。執紼誌壙。我涕滂沱。豈我私哭。與人攸嗟。

明治二十四年歲在辛卯五月 嗣子 僊之輔建 舊友等捐貲助費

正五位男爵本多副元篆額 石津發三郎(灌園)撰文 巖本範治書

耕雪松井翁碑 在武生龍泉寺

翁姓松井。名篤。字子行。耕雪其號。小字稱六右衛門。文政二己卯三月十三日。生於越前國南條郡府中大黑町。性好慈善。又興學勸業。効績德澤布于全邑。然而翁歿後。天不幸於子孫。家道漸

衰。嗣子移居於京都。吾輩曾受教於翁者。惜其偉蹟失於舊邑也。同志胥謀。建碑於邑西龍泉寺以表翁之生地。若其傳詳翁終焉之地京都本能寺之墓碑。今不贅焉。明治廿三年五月十二日。距翁歿年月日。實六周年。

題字從三位勳二等渡邊洪基書 碑陰文本多鼎介撰 片山平三郎書

建碑者 渡邊 洪基 齋藤修一郎 渡邊 悌二 中島 又五郎 佐藤 正克

大森 哲人 杉田 定一 本多 鼎介 山田 卓介 片山 平三郎

和田 彦六 淺井 權兵衛 內田 甚右衛門 內田 謙太郎 三田 村甚三郎

松井家系圖 逍遙園持佛堂所藏耕雪翁自筆過去帳・武生久成寺過去帳・除籍謄本に據り作製す

開祖 二世 三世中興 四世

六右衛門 六右衛門 六右衛門 六右衛門
天和元年八月二日歿 延寶九年四月十二日歿 延享元年九月十日歿 寶曆十二年十月二十二日歿
海壽院直清日成 信成院道運日緣 察心院隆法日高 琢信院隆慶日耀

五世 六世 七世
六右衛門仲篤 六右衛門儉成業 六右衛門惟孝

寬政十年四月二十七日歿六十一歲 享和二年六月二十四日歿四十五歲 天保十三年正月九日歿八十一歲
令院院還種日眷 居士號本山免許 仁讓院隆耀日幹 仁妙院隆念日政 別家より入家

八世
六右衛門 俗名六三郎(實父)

文政十二年九月二十五日歿四十歲
本門院隆開日顯 池田より養子

妻 松井氏(實母)

天保十四年四月二十一日歿四十九歲
報身院妙詮日量

六右衛門 (繼父)

天保十三年六月二十六日歿三十九歲
證量院報智日感 山王より養子

長男

深妙院智音

弘化四年五月二十六日歿五歲

二男十世

仙之助 又專之助

大正二年一月二日
和歌山にて歿す六十七歲
宏謨院翠雨日等

長女

小ひで

熊本志垣氏妻
明治三十六年九月三日歿三十二歲

二女

かね

明治十九年二月九日歿二歲
妙金嬰孩

長男

益太郎

現在京都鳩居堂勤務

長女

あゐ

現在武生松井伊助妻

三男

泰次郎 班士格

明治十九年九月二十七日
福井にて歿す三十三歲
泰岳院了聽日理

四男

謙三郎

山中家と離縁し京都にて分家す
明治二十七年十二月十四日歿三十四歲

五男

八十四郎

京都にて分家す
大正八年七月五日歿五十四歲

六男

頼介

塚町圓明寺弟子 圓隨日喜法師
明治十七年十二月五日歿十六歲

長女

某

安政四年九月七日歿十二歲
寂光院妙蓮

二女

某

安政五年十一月四日歿十歲
唯乘妙船

三女

つね

上池田村梅田氏妻
大正九年四月十日歿七十歲

九世

六右衛門 耕雪 士格待遇

明治十八年五月十二日歿六十七歲
本有院耕雪日篤居士
葬京都本能寺

妻 貞

明治十九年一月三十日歿六十四歲
貞室院妙篤日耕大姉

元府中京町八木甚左衛門(通稱西八木)
二女

四女 某
萬延元年十一月三日歿八歳
智玉妙了
五女 某
安政五年十一月一日歿
妙夢水子
六女 玉
明治三年五月十五日歿八歳
淨心妙玉

二 藩覺立教館

幕末尊攘の論大に興り、嘉永六年米艦來航に朝野を驚かしてから、全國の各藩競うて文武獎勵に留意するやうになつたが、いづこも財政の窮乏で建學資金に困難であつた。福井藩では文化八年に御米問屋内藤喜右衛門が金一千兩を獻じて正義堂を建て、勝山藩では天保十四年に藩醫秦魯齋が金數百兩と藏書數十筐を獻じて成器堂を建てたことは、當時奇特の舉であつた。其他鯖江藩は文化十一年に進徳館、大野藩は天保年間に明倫館、丸岡藩は享保四年に平章館、小濱藩は安永年間に順造館をそれぞれ建設した。其創立に前後あり、學風に朱陸あり、出資に官民あるが、大に力を學政に用ひて人材を教

育するやうになつたことは、全く時勢の然らしむるところである。

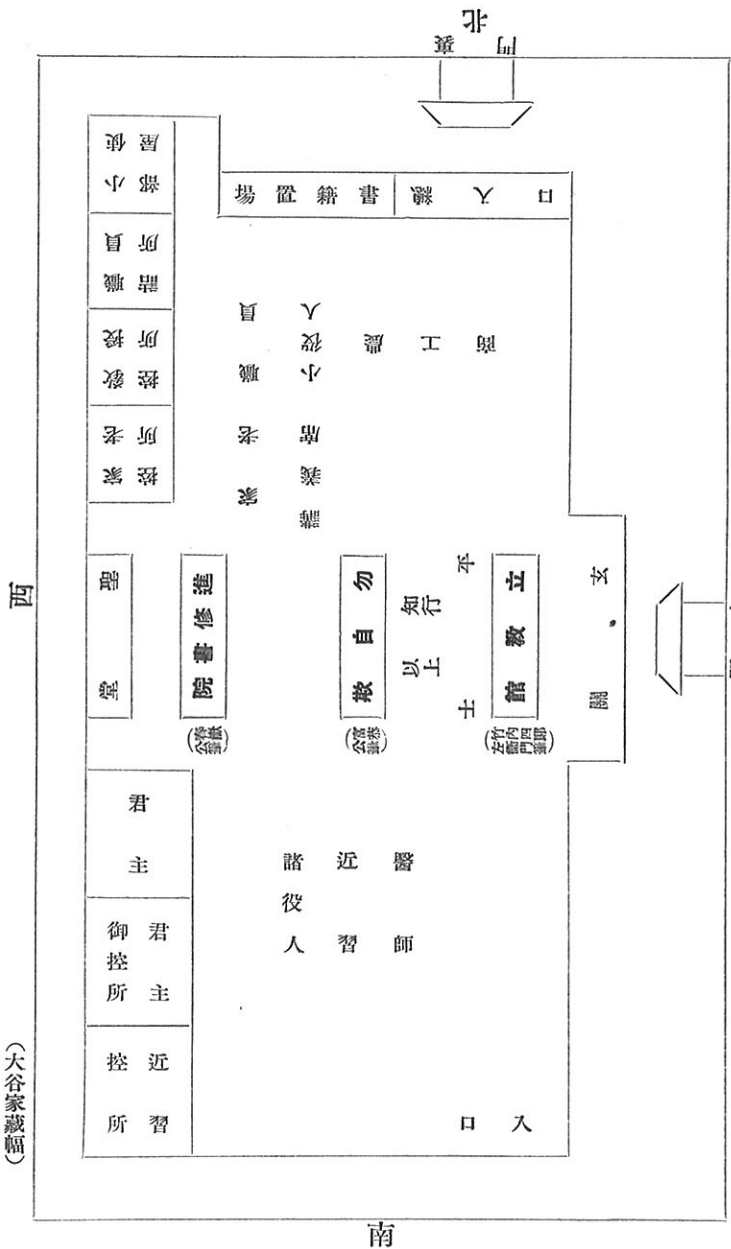
府中は領地二萬石の附庸で、財政も格別窮乏して居る、よし他藩に負けじ魂はあつても、遅ればせに藩覺を建設することの困難の折柄、公事に熱心な町人の翁は、他藩の續々建學するのを見て、府中教學の不振を慨し、遂に一書を領主本多富恭君に上り、私財三百兩を獻じて建學を請うた。領主これを嘉納されると、直に家臣松本右馬丞・土生多忠の兩人に造營奉行を命じ、地を府中の通稱松原の東南角屋敷(後に石渡家、今窪田醫院)に卜して校舎を建築し、立教館(小學立教第一の語)と命名した。翁は尙領主の諮問に應じて教育方針並館則案を提出された、其書面は後日領主から土生多忠へ下け置きになつた。今これを一讀すると、翁が時勢を洞察して教學を振興せんとする眞精神を窺ふことができる。又當時制定された教科目や職員組織等を見ると、翁が上言された意見に基づくものが多い、翁はたゞ藩覺の出資者たるのみならず、亦隠れたる學政官というても過言ではない。

其後藩覺は元治元年に領主の御屋敷中(今福井銀行武生支店)に移轉し、更に松原北側の元武生病院現在武生公會堂の地に移轉したことは、當年藩覺の句讀師であつた大谷彌學の立教館沿革概略や最初の立教館址に居住された醫學博士土肥慶藏の進修覺追懷談で明白である。今同翁が遺徳顯彰の爲、建設した建學記念碑の位置は、即ち最後の立教館址である。

我實家の石渡は武生の松原の東南の角屋敷である、即ち現在瓜生氏の宅(今窪田醫院)がそれであつて、松原を隔てた向ふ側、今の武生

舊府立教館略圖 但聽講式場(建坪四十八坪)

毎月六次聽講平素は兩局に分ち南は講義室北は素讀室地所
先は現今蓬萊區瓜生病院(今窪田醫院)のあるところ又移轉
所の東南松八樓附近(今福井銀行武生支店)なり



西

(大谷家藏幅)

病院(今武生公會堂)が舊立教館であり、石渡の西隣は石川氏である。立教館は初め石渡の本宅の所に在つたのを、一旦舊君の御屋敷中に移轉し、更に右武生病院の處に引越したのである。此の立教館は言はゞ藩の大學であつて、そこには主として家中の青年が入学した。其外、富豪の子弟で學才ある者も、特に参加を許された。而し町家の子弟は概して寺子屋の普通教育で満足した。石渡の隣家の石川はその寺子屋の一つであつた云々。(鵜野游戲)

創立當時の立教館の主たる教授は沖蘊齋と竹内確齋であつたが、惜しいかな、兩先生は安政六年八月五日と十一日に前後疫病で白玉樓中の人となられたので、藩費は忽ち教授の首腦者を失つて一頓挫をしたが、文久元年に伊豫國吉田藩(後宇和島と改稱す伊達氏の支封三萬石)の儒者森余山が偶々遊歴の途次府中に來られたので、翁は友人山本怡僊とこれを教授に推舉し、領主は客儒として待遇されたので、絃誦の聲が復盛んになつた。余山の手當は翁と怡僊が其三分の二負擔されたといふ、いかに翁等が教學に熱心であつたかを知ることができさる。

怡僊は舊府中の著姓山本平三郎(天王屋)の七世、初名仙治郎、後階と改め棋堂と號す、文藝を嗜み、耕雪翁と親交あり、明治十三年九月十二日歿す、享年五十一、妻は栗田部木津氏、橘曙寛の賞母鶴子は即ち怡僊の叔母なり。

大谷彌學の注記に「立教館の聖像及十哲の牌は創業の際よりあり、十哲の牌材は栗を用ひたるもの、悉く怡僊と耕雪の獻に係る」とあり。

左記の藩費の沿革・職員名列及略圖は、當年其句讀師であつた大谷彌學が明治四十四年に記述されたものであるが、藩費創立年代が文部省編輯の日本教育史資料と同じく嘉永六年とあるも、當年造營奉行であつた土生多忠が翁の立案書類に奥書されたものには、安政三丙辰年とあり、姑く後説に従うた。

立教館沿革概略

窪田貫一 閱

立教館創立教員名列

一七

余山は經學・詩畫共立派な學者であつたが、天資磊落で、氣焰萬丈、喜怒小兒の如く、善く飲み善く罵つたさうで、居ること三年飄然として府中を去つた。余山の學問・閱歷・性行等は豐繪詩史及渡邊悌二郎談話（鶉軒游戲）に詳述されてあるから、今こゝに拙著「若越墓碑めぐり」を引用すると

余山名は時習、字は幽吉、通稱恕輔、余山又悅翁は其號で、伊豫國吉田藩の儒者、祖父は退堂、父は秋水、秋水に四男あり、余山は其二男である。文久元年府中に來遊し、藩塾立教館教授となり、居ること三年で辭し去り、江湖に放浪し、明治十年八月十八日歿し、豐後國大分郡竹中村曹洞宗勝光寺に葬つた、享年六十。墓は表面草體にて「森余山墓」と題し、右側面に歿年、左側面に「法名嚴恭院余山時習居士」と刻してある。

要するに、藩塾立教館は翁の獻金に頼つて創設され、沖・竹内兩教授に頼つて育英の基礎を造られ、客儒森余山の嚴肅な教鞭で強く刺戟された。余山の在任期間は甚だ短かつたが、明治維新後に府中から輩出した幾多の英才が受けた感化印象の最も深かつたことは、當年受業の先輩達が懷舊談で知ることができる。かゝる異彩ある先生を推舉し且其手當まで負擔した奇特者は果して何人であるか、翁等實に其人であつた。

醉後題立教館壁上

森 余 山

狂直元嫌隱ト醫 欲將迂拙報明時 治安有策誰能獻 溫飽無求獨自知
持志曾知穿石箭 愛君唯比向陽葵 微功未立人休笑 一寸丹精涅不緇
吟誦一番、先生平素の志を概することができ、先生在任中は詩酒徵逐して、府中詞壇に一段の光彩

を添へられたので、今に至つて其遺墨も珍襲され、歴代の教授・句讀師中獨り先生の名字が尤も人口に膾炙してゐる。

翁は安政三年に藩塾設立を願出で、嘉納され、尋いで教育法につき意見申出でよとの内命があつたので、翁は告諭文から選舉科目・職員組織・教科目等の要項を立案して内申された。今左にこれを掲げて、當年教育の内容を知らしめ、且翁等が建學の多大なる功績を追懷したいと思ふ。

教育法案内申書

上 言

一館中講學之儀、御一藩文武之修習に就、藝術之偏固偏廢無之様仕度、乍併、人生之氣稟敏捷遲緩沈深豁達寬裕剛毅其他百般之品格可有之候得者、各其性質所得之淺深厚薄は不一様候とも、大概於所屬則同一揆に可相成候様御教導有之度、先第一に眞文眞武を基本と致し、次に藝術に至候而は、銘々文藝武術出精練磨有之候様相成、只管人材を御仕立有之御座度候事、右眞文眞武と申は、治には腹心股肱之良臣と相成、亂には軍略干城之名將と相成、古之所謂出則將入則相と申候様に相成候様、兼而銘々平日相心懸居、晝夜竭レ力勵志候様仕度、若夫藝術偏固偏廢に相成候時は、隨陸不レ武絳灌無レ文之類、相互に甲乙之黨自然出來致し、甲には刀砲不レ能治民と申候候、乙には詩文不レ能却敵と申應候而、相互に機變轉化之功勞も無之、やゝもすれば歩卒賤輩同様之心得に相成、畢竟義利公私之辨別をも分明に不レ解得、心中朦朧として、天日の如き明德をも何方にか飄散致候、別而方今之御時態に而、因循偷安束手傍觀致し居候而、總かに口腹之爲に大義を遺亡致様相成候而は、天下國家之罪人とも可相成勿論、是等之儀も厚く演義講述致し、公戰私闘重レ義輕レ利之道理、闕藩知所嚮候様相成候半者、庶幾くは追日偏固偏廢之凝氷泮消候而、

眞文眞武之道を開き、明德之光輝相照候様可ニ相成ニ候半歟、依レ之館中之規則別紙之次第御公儀を以て御刪正之上、萬一御採用之
廉も有レ之候は、重疊之至に奉レ存候。

立教館規則

告諭 五條

一學問心得方之義は、仁義禮智孝悌忠信之道を日夜心懸候て、出精に修行致し怠慢無レ之様、日用萬端に就、天理人道勤儉忠信義利
公私虛實清濁等之理を分明に見究候而、國務政事之根本を開き、畢竟治安之一助に可ニ相成ニ候様、志を勵し精を磨き大學論語を始、
其他聖經賢傳之義理を研究致し、卓然として見識高達に相成候半、先學問之本業成就と可レ申、且和漢歴史諸子百家之書、其外
有益之書類を博く渉り人情世態を知り治亂興廢人物之得失等之事を明に辨ずるを以可レ爲助業ニ候事。

一讀書心得方之義は、經書は勿論、歴史百家何之書に而も、畢竟學問之爲に候得者、徒に數千卷之書籍を涉獵致し候連、文字識りに
相成、發門之功無レ之而は遊藝同様に可ニ相成ニ候、別而當今之讀書生、一日も早く學問之道理を明に辨じ國務政事之道を研究致候
様心懸可レ申、其上に而博覽多識に相成候様は、銘々力量次第之事に候、讀書生別而篤實恭敬謙遜溫厚を主として、決而人之過惡
を揚げ、利口佞辯を以て猥りに人を誹謗致申間敷候事。

一會輔心得之儀は各自分之所レ長を以、人之所レ短を扶助致し、相互に忠告善導を專一に致し可レ申、貴賤少長何れも禮讓を不レ可レ失
候、只學問之生熟を以て相互に得益を心懸可レ申事。

一行儀心得之義は、少年勤學之者童子素讀之者平生第一に相守可レ申、貴人大人に向ては必恭謙禮讓を盡すべし、進退應對等丁寧謹
慎を基本に致し可レ申、尤小學齊家寶要等之諸篇空く讀過すべからず、平生世人之嘲を受不レ申様可ニ心懸候事。

一文章心得之義は、讀書人漢文之書様不ニ心得候而者、書籍之文義難レ解候、若自分發明之事有レ之候而も、明白に書取兼候事故、平
生讀書中作文之心得可レ有之事、和文俗文に而も義理之通候様に書取候を專一に可レ致候事、但詩賦は性情を吐露し吟咏を以て學

者之樂と致候義に候得は、閑暇之時節空く時日を送り無用之遊戯を慰候より、江風山月に情を寄せ吟咏風致を以相樂候方可レ宜候
事、併文章詩賦に拘泥致し、學問之道を怠り候而無益之風流才子に相成候而は、何之役にも立不レ申候得は、兼而可レ有ニ心得ニ候
事。

右之條々館中第一之規則に候得者、入館之人々貴賤長少に不限、法度嚴重相守可レ申、若違反之輩於レ有レ之者、館中之政事不レ被ニ
相行、且學問之得益無レ之候得者、臨時御調之上館内可レ令ニ禁足ニ者也。

選舉科目

一館中選舉科目之次第、督學文武御奉行御手元に閣藩姓名錄御備置、月旦評を以各名之行狀心術等細密に秘記被ニ成置ニ候而、執法職
御立會之上一歳之内春秋兩度御取調和に相成、是を小試と名け、暫科目に當て置、三歳を経て前後御取調和に相成候は、才德並
進みし者、或は依然進退無レ之者、或は下て犯ニ禁忌之目ニ者種々可レ有レ之候得は、是を以大試と名け、其上御評議を以御選舉有レ之
候様仕度、則科目三等に分け左に相記置候、尙御刪正之上御取捨有ニ御座ニ度候事。

但隱居之身分相省き置、童子之分は八歳以上十四歳に至る迄、別段一職分御立置、童子科目有レ之可レ宜歟。

一心術勤怠精惰により變化昇降可レ有之科目を以爲ニ内則。

一天性之所得にて自然發達可レ致候科目を以爲ニ外則。

但外則之科多分内則之舉人可ニ兼有ニ之答。

一生質とは乍レ申心得方不レ宜身持不埒之者、科目を以爲ニ禁忌落第一

孝義忠直 君父に仕て其身を忘れ、眞實に奉公を致し、
他人義理堅く素直に正數心得有レ之者。

寬裕篤實 去り嫌ひなく徧く人を容て、何事
も手厚く實意を以取斗致候もの。

剛毅果決 氣性の強さ根氣も丈夫にして、ものゝ見切
り早く何事も速に取さばきの出来るもの。

方正廉潔 心持きれいにして屹と取締ありて、都て依怙愚直なく物事おほやけに取扱もの。
敏捷豁斷 事に臨み取さばき方速にして、包み藏しなく即座に判斷致し前後念着無之もの。
深計遠慮 眼前何様之事出來るとも少しも驚かず、後々の害にならぬ様深く心をくばり勘考するもの。

以上六科爲内則

能文善書 書取もの惣て文言のつゞり方よく、いひ取巧者で殊に手跡もよく出来るもの。
辯辭應接 辯舌よく萬事掛合振り能行届き、他人も聞え方よき様に都て早く埒のあくべきもの。
數量理達 米錢の算勘巧者にて筋の通り方よく、損益の理前を辨へわかりよく働きあるもの。
博物多識 故事來歴を始、普請作事農商並動植何事も委く巧者に心得あるもの。
廣聞疏通 諸方の形勢時憲の得失等、其外世間廣く探り知り其筋々に委く辨別あるもの。
嚴壯勇烈 生れ付達者にて力もあり、足も丈夫にて氣前もつよく姿もきびしく、何事にも驚かず勢きかんなるもの。

以上六科爲外則

倭巧邪曲 上手に人にへつらひ世の受をよくして、己が身に利分になる様に内心はひかまかりあるもの。
貪戾剛愎 道理にもとり、己が爲に私慾のみむさぼりてつよく理をまげて人を押附通すもの。
放肆怠惰 心の取極りなく身持あしく、其上役儀もおこたり勤向を不精にいたすもの。

昏愚鄙劣

人間に道あることも知らず、學問の講釋もわからず、只金銀衣食に目を附生涯いやしく暮し居るもの。

怯拙柔弱

生れ附氣性なく何事にも驚き恐れて、たま／＼物言取斗事も仕損じ多く何の役にもたぬもの。

浮華輕薄

少々眼前才氣ある者に何事も早合點して、道理をしらず前後の辨へもなく、うか／＼暮して衣服酒食などに耽り大切の事もかるく人に洩し物事仕送る事出來ざるもの。

驕慢執拗

何にても少しは出來る者にて、夫を鼻にかけて人を下た目に見て自分の事は非を理に言ひ送るもの。

以上七科爲禁忌

右三等の科目、人品格様に不三相拘、公正の御評議を以科目を御定に相成候得ば、兼て銘々可有其心得二管に候事、士相別三日刮目して可レ見と既に古人之言にも有レ之候得ば、實に士人心得方如此有レ之度候、勿論出精次第御選舉有レ之、相應の御役儀をも可レ被レ仰との御趣意に候得ば、各々切實研究竭力勵志にて、聊無油斷可二相心得二者也。
右科目御定にも相成候はゞ、如此御振出に相成可レ申様仕度候事。

講經句讀役配

一箇中講經讀書之義、是迄御例格も可有御座二候得共、唐土にて古昔一經に通候者、明經之科に舉候儀も有之由、況本朝と申漢季之世にて諸經書を見極候程の事不容易事業に候得ば、今般經書を以役配致し、各々引受の經書を以正業と定、傍諸經書を始歴史百家に至る迄博く涉獵致候様仕度、素讀生之儀は大凡句讀局を分け讀書之數を限可レ申、且又童子の急務は洒掃應對を始、行儀正敷教訓致候はゞ、追日行儀正敷相成、夫より憤起致し自然身持よろしく相成可レ申と奉レ存候、依レ之幼儀師を定、讀書之外禮讓進退之道を指南致候様仕度候、算學師局も御立置、童子之成長致候者へ半季一年程は習學爲レ致候も可レ宜奉レ存候、武家としても算術に疎く候ては萬事に差支多く有レ之事に候、且文章は漢文にても和文俗文にても日々必用之事に候得ば、童子之頃より綴方爲レ習置、他國他所へ往復之事共理非分明に認方出來、他之嘲笑を不レ受候様仕立置度候事。

右之件々御熟考之上、諸局師御立置被_レ遊候はゞ、館中御一新に相成、學問之道御振起に可_二相成_一候半歟、依_レ之大凡役配之仕分相記置候間、御刪正被_二下置_一度候以上。

教授職 闕

惣裁 督學 文武御奉行

訓導師 五員 但人數不足之時節は兼役可_二相勤_一事

句讀師 八員 但同上

文章師 二員 但訓導師之内にて兼役之事

幼儀師 二員 但別段御入選に相成候はゞ宜敷不_レ得_二止事_一時は兼役

算學師 二員 但別段御立置候事

以 上

訓導師

一員 周易附老子・莊子・列子・管子・墨子等

一員 三禮附文獻通考・文公家禮・小學齊家寶要等

一員 詩經附離騷・文選・唐宋詩醇等

一員 書經・春秋三傳附國語・戰國策・史記・漢書・通鑑・本朝國史等

一員 孝經・大學・論語附中庸・孟子・荀子・家語・孔叢子・文仲子・韓柳文・八大家等

以 上

句讀師

南局 孝經・大學・中庸・論語・孟子・小學

北局 詩・書・易・禮記・春秋左傳

以上句讀師南北局に相分れ、素讀生的人數により繰替可_レ申、右數部之外句讀師之職外可_二讀書_一事。

文章師

別局 時刻を限、漢文和俗文とも并に詩賦之類刪正可_レ致候事。
但月毎に三會文章軌範之類講釋も可_レ然歟。

幼儀師

別局 小學齊家寶要等の書を本として、日用進退應對行住坐臥其外共心得方指南可_レ致候事。

算學師

別局 九々割聲八算見一等を始、其外書生好に應じ、諸算術秘奥に至る迄望次第之事。

以 上

輪講廻讀 訓導師之差圖を受、隨宜可_二取斗_一事。

文會詩會 文章師之差圖を受、隨宜可_二取斗_一事。

策 問 但月毎に三則、凡十日毎に一則、答文は漢文和文俗文不_レ苦候事。

詩 題 但月次三題。

右二種之分は乍_レ恐

御上より御策問詩題共館中書生并其外共御試之爲に御下げに相成候はゞ一段の御事にて、書生始格別勵_レ志憤發可_レ有_レ之事と奉_レ存候以上。

右安政三丙辰年、松井六右衛門氏篤志を以て學校一棟献上致度旨富恭君へ願出、趣意御嘉納相成、松本右馬丞・土生多忠へ造營奉行被_レ命、依て教育の方法存寄有_レ之候はゞ可_二申上_一旨内命あり、六右衛門氏乃ち相認指上候書面にして、其後多忠に御下げ置相成候ものなり。

右は翁の建學の主旨並に教育方法であるが、其後藩立教館において制定された規程類は文部省編輯の「日本教育史資料」を見ると、翁の意見書を採用されたものが多い。

昭和九年十月、武生町有志者が教學の由來を明かにする爲、舊立教館址今の武生公會堂東南隅に建設した記念碑文は左記の通である。

建學記念碑

邑之鉅商松井耕雪翁。常懼邑無庠序之設。人材放失。安政三年。獻黃金三百兩於邑主本多侯。請建學。侯嘉納之。相地於松原之南。大興黌舍。命曰立教館。我邑始有庠序之設焉。後松平春嶽公。賜名進脩書院。其匾額今猶存於東小學校云。抑翁之有功於我邑也。多矣。而其最可稱述者。爲此一事。因有志胥謀。建記念碑。俾後昆知我邑文教之所由來。

昭和九年十月上澣

男爵 本多副恭題 土生 彰撰 西脇吳石書

三別墅逍遙園

翁は萬延元年、齡四十二歳の時、府中東南景勝の地を下し一別墅を設けて逍遙園と命名し、本宅から此處に隱居し、名士を延いて物外の遊をせられた。此別墅は「東南普請記」(松井伊助氏藏)に據ると、

萬延元年三月二十日工事を始めて、同年十二月末日に竣工してゐる、其費用は左の通であつた。

屋 根	二、六百三十匁七分五厘
材 木	十二、二百二十匁二分五厘
石 土 砂	三、五百四十九匁三分
大工事力諸手間	十七、四百二十七匁七分二厘
建 具 類	二、九百九十一匁二分八厘
疊 敷 物	一、三百九匁
釘 金 物	二、三百三十匁三分
諸祝儀挨拶謝儀	三百八十九匁九分二厘
小 雜 用	八百七十三匁八分一厘
樹 石 道 具	一、二百四十三匁三分五厘
土 藏	四、二百三十六匁一分
惣 高	四十八、七百九十二匁七分八厘

亭園の結構古雅にして、籬内に延翠樓・樅岡・望遠處・涵碧池・柳嶼・魚樂亭の六景と、籬外に雛峯・龍潭・帆船・日溪・東林・蘆山の六景と、併せて十二景を具備して、月に雪に、暮雨に歸雲に、其他をりくの眺望皆佳ならぬものはない。匾額「東南奇勝」の四大字は、幕府の代官淺野蔭潭の筆である。世人單に「東南」と呼べば、即ち問はずして翁が別墅であることが判る。翁は又友人山中信天翁を介して伊勢津藩儒齋藤拙堂に記文を請はれた。拙堂は信天翁の語により、記を作つて翁に與へられ

た。其結末に「主人風流蘊藉。能吟咏。不類市井人。」とある通、翁は市井の俗物が豪華を誇るの類と全然其撰を異にした人物である。又福井の歌人橘曙覧は親しく此園に遊んで記文を書き「誠にとよきせうえうどころぞ」と稱へられた。其他をりく名流の雅集もあつたやうだが今一々傳はつてない。たゞ文久二年九月二日、藩費立教館教授森余山を始め松本・土肥・本多・三上等の詩友と主人翁が漢詩の合作に、余山が「四美」の二大字を題せられて、錦上更に花を添へた三田村家の藏幅は、逍遙園雅集中の珍なるものゝ一である。

天資恬淡の翁は、往年私財を捐て、藩費を設立し、廢藩後は更に此別墅を舊領主本多家へ獻じて其遊息の所に供せられ、其後本多家から轉々して現在某氏の所有になつてゐる。屈指すれば、翁が此園を築いてから星霜既に七十有五年、當年の主翁は既に亡して、遺愛の林泉空しく存し、樓臺は稍々荒廢に歸したが、泉石の妙、眺矚の佳、猶半日の清遊に適するに足るものがある、まして多くの名士の詞藻に入つた舊園であれば、郷土の異才耕雪翁の名と共に永く保存したいものである。

贈逍遙園主人松井耕雪 文久壬戌

小 原 鐵 心

遊_レ越過_二君園_一 來_レ京始逢_二君_一 相逢只一面 來_レ及_二話_二心肝_一 預識_二園中趣_一
瀟洒若_二其人_一 我初過_二園時_一 斜月照_二松門_一 隔_二籬認_二鏡面_一 中有_二老龍蟠_一
翼然何物欬 鳴琴細々聞 欲_二就而窺_レ之 低徊意未_レ馴 亭俯清池上

泉迸層崑間 左折得_二小橋_一 右逕排_二葦前_一 有_二丘宜_二遠眺_一 山影淡_二於烟_一
樹間燈幾點 穿_二靄熒々然_一 入_レ林又出_レ林 高燭紅照_二筵_一 園丁代_二主出_一
延_レ予坐_二青氈_一 寒暄丁寧語 呼_レ僮茶一煎 我視結構巧 抱_二感重倚_二欄_一
已具_二幽邃致_一 加_二之樓閣新_一 主人胸底秘 于_二斯宜_二洞觀_一 但能慕_二陰操_一
不屑_二爲_二隱淪_一 此訣我同調 思_二之夢相牽_一 他年再會日 此意仔細論
持論之相合 有_二如_二貫_二的丸_一 (鐵心遺稿)

逍遙園雅集

壬戌季秋初二。霖雨初晴。余獨涉_二園翫_レ景。無聊轉甚矣。適清風社諸君子見_レ訪。限_二韻晴字_一。賦_二四韵詩_一誌_二喜_一。

松 井 篤

閑園秋未_レ老 風物適_二幽情_一 唸杖不堪_二雨_一 書窓偶喜_二晴_一 白雲回_二嶺靜_一
紅葉映_二池明_一 門有_二詩人叩_一 松楓俱被_二榮_一
與_二同社諸君_一遊_二逍遙園_一限_二晴字_一同賦。

森 余 山

與_二客叩_二門促_二賞情_一 園公不_レ厭笑相迎 書窓久已苦_二淫雨_一 吟履何曾_レ睽_二好晴_一

翠羽飢來尋石立 緋魚樂處出波行 東欄一角山將夜 醉葉分松潑眼明

逍遙園卽事

松本 體

閑却吟筇欲兩句 新晴容易動詩神 更憐涵碧池中水 一洗心頭百尺塵

隨余山先生遊逍遙園

土肥 匡

雨歇殘蛩隨處鳴 繞檐點滴忽有聲 池光山色遙相映 耽賞園中園外晴

同

三上 敦

經旬淫雨惱幽情 雲漏秋陽忽眼明 杖履尋詩何處好 名園松菊弄新晴

逍遙園記

齋藤 拙堂

越前府中逍遙園主人介門生山中子文請於余曰。某有別墅在城外。東南暢豁。瞰雛峯龍潭帆村日溪東林蘆山諸勝。宜月宜雪。暮雨可看。歸雲可望。是爲籬外之勝也。望之有樓曰延翠。有岡曰縱岡。其最高頂曰望遠處。降至庭中。有池曰涵碧。其島曰柳嶼。其亭曰魚樂。竹樹瀟灑。花木幽艷。匝樓繞池。顧眄怡顏。是爲籬內之勝也。內外十二勝。合而名之曰逍遙園。蔣潭淺野公嘗書東南奇勝四大字。作扁賜之。但未有記。今欲煩先生。幸許之。余以爲園之勝如此。乃知主人燕處之次。挂笏對山。把盃臥水。坐花跂石。嘲弄風月。超然自適乎物外。逍

遙之樂如何哉。但余住千里外。未嘗親涉主人之園。又未嘗識主人之面。而且不識。何以能知其心之樂否而言之。余隱居津城外茶磨山莊。莊之內外。亦有諸勝。山水之觀。春秋之賞頗具。余日夕優游於其中。以自娛樂。今有主人之請。乃因我園。以想像主人之園。因我樂。以推測主人之樂。於是乎。咫尺可以論千里。主人之園。雖未嘗親涉。而猶親涉也。主人姓松井。別號耕雪。風流蘊藉。能吟咏。不類市井人。余聞於子文如此。又可彞髣髴主人面目也。是不可不以記歟。遂書。(拙堂文集)

編者云、此記文の謝禮として金千疋と絹本代三朱を拙堂に贈つたと、翁が清玩姑藏錄に書いてある。

松井氏逍遙園の記

橘曙 覽

せうえうといふ事こそをかしけれ。さるは、からのものなるを、もとよりのこの物いひめきて、ふるくより歌ぶみなどにも、人あやしまでとりもちふるよ、げにほのかたのもじこゑのやうに、こわくしうはあらで、うちぎくなつかしうさへどあなるにや。こをととりて、なりどころの名にし給へる、いとつきづきし。園のうちのつくりさま、あやしう物ふかく、木立ひるをくらうしげらひたるに、鳥どもの囀りかはす聲々、けどほきみ山に入りたらんやうにて、いみじうをかし。魚樂亭といふが、池水にのぞきたる、魚むれてこのしたをくくあそぶ。垣根のあなたに、青山いくつとな

く、見ゆる中に、雛が嶽の、ひとりむれを出で、我はがほなるものをかし。日野川水音たかうひ
ぐく、ねざめしたる曉などに、枕そばたて、聞きたらん物すぎけさへそひて、こよなうをかしから
め、島このみ給ふかたのたくみは、さるものにて、かうたちひろごりたる、千さとのながめを、魚樂
亭の窓のうちに、とりあつめ、つねすき給ふ唐うたの題にし給はん、誠にいとよきせうえうどころ
ぞ。(蘆屋文集)

四 翁の造詣と藏書

凡そ其人の學殖と造詣の如何は、其藏書の質と量において略々これを窺ふことが出来る。今翁が「藏
書點檢錄」(原本今立郡國高村塚町圓明寺藏)を調査すると、本箱一番から九十番まで凡七百六十二部
五千餘卷ある。それは經史子集の各種に涉つてゐるが、就中和漢の詩集・畫譜・扇面其他一般儒流
の書架にない珍本稀籍が多く蒐集されてゐるので、宛然私設圖書館の觀がある。こんな時代に一介の
鎌屋主人の獨力を以て購求不便な北阪の地に、かくの如く汗牛充棟の圖書を蒐集して、これを愛誦
し、詩に書に畫に往くとして可ならざるなき作品を出したことは、既に逝ける和漢洋の藏書家として
著名な醫學博士土肥慶藏を除き、恐らくは舊府中における空前の異聞であつたと思ふ。

此目錄は去昭和六年土肥博士によつて始めて武生郷友會誌第五十三號に紹介されたが、今回翁の事蹟調

査に際し、更に古びた「藏書錄」と「世藏書籍錄」の二種(松井伊助氏藏)を發見した。前者は寛政
七乙卯稔(百四十年前)上冬中旬に松井家五世六右衛門仲篤(松隱子)が男成業・孫伯基と三人で整
理した家藏圖書の目錄で、本箱一番から五十番までの圖書數通計二千七百四十二卷ある。和漢書の外
に佛書・俳書・醫書・謠曲・歌舞・淨瑠璃本などが特に注目され、又目錄中に仲篤の著書二十一部二
十一卷と令脫院靈の著書九部二十一卷の書名が記載されてゐる。令脫院は仲篤の法名であるから死後
追加したものであらうか。後者は翁自筆の目錄で、最初に仲篤の殘存圖書六部二百十五卷(外に佛書
之部略之とあり)と、六世六右衛門成業が購入圖書二十二部五百二十卷(外に三十四部あり)と、八
世六右衛門楚雞公(翁の實父)が購入圖書二十六部(卷數不詳)の目錄を列記してゐる。翁の代に至
り嘉永五年の大火に罹り、先代藏書の焦爛又は泥汗の分は皆賣拂ひ、更に毎年新本を江戸・京都から
購入し每部買値段を帳簿に記してある。圖書は大火前の殘存百七十九部千三十一卷と大火後嘉永六年
から慶應四年まで十六年間に購入されたものを通計すると左の通である。

年 號		部 數		卷 數	
嘉 永	六	三四	一六六	七三一	
安 政	元	六四	三九一	三九三	
同	二	六〇	三〇六	七九一	
同	三	六六			
同	四	一一七			

同	五	七〇	五二五
同	六	四六	三四四
萬	元	四五	二四七
文	久	二五	三三八
同	元	九一	四八五
同	三	六三	五三七
元	治	一三	一〇二
慶	元	八七	七七二
同	二	一七	三一二
同	三	六三	七三九
同	四	二八	六四
同	四	八七六	六八五二
總	×	一〇五五	七八八三

松井家はかくの如く先代仲篤から歴代藏書癖があつた、翁が少壯から學問を嗜み圖書を蒐集されたのも先代の家學に負ふところが多い。先代の藏書は嘉永五年の大火で大部分烏有に歸し、其殘存と翁一代の新購入を合せて七千八百八十三卷に上つたことは實に驚異の事である。これをかの「藏書點檢録」と比較すると、「藏書點檢録」の方は二百九十二部二千八百餘卷減少してゐるのはいかなる事情か、「世藏書籍録」は購入された時の記録で、いはば元帳であり、「藏書點檢録」は後年更に調査された時の目録で、其差額はいかに處分されたか、又藩に献上された藏書數は何程であつたか、以上三種の目録では全く不明である。

此等の圖書は其後いかに散佚したか不詳であるが、今日幸に此三種の目録が遺つてゐるので、吾人は翁の許可を得て親しく其書架を一見して腹のふくる心地がする。土肥博士は其病歿二週間前にかの「藏書點檢録」の原稿を武生郷友會誌に寄せて世に紹介されたが、若し今回發見した仲篤の「藏書録」と翁の「世藏書籍録」の二種を博士の生前に一見せしめたなら、博士は更に「舊府中に奇特の藏書家あり」と感嘆されたであらうと思ふ。

人は古書堆裏に没頭すると、兎角時代遅れの道學者になり易い傾向があり、又詩文書畫などに耽溺すると、兎角活社會から迂遠になり易い通弊あるが、翁はかゝる世間の陳套に落ちずして、政治經濟の活眼を以て福井藩では當代の偉人由利公正・中根雪江・横井小楠、府中藩では山本怡僊・松村友松など、往來して、國產獎勵の途を開かれたことは、儒流中誠に稀觀の人物とはいはねばならぬ。

五 翁の公的生活

幕末に至り海内の諸藩いづれも財政窮乏し、其救済策としてしばしば節儉令を出して上下の緊縮を促すことが國富を増進する唯一の方法とのみ考へられ、積極的に殖産興業によつて歳入を増加することは、諸藩の重役や道學先生の頭腦では到底案出できなかつた。

福井藩の財政も御多分に洩れなかつたが、英明の松平春嶽公によつて文政五年福井藩に招聘された熊

本藩の傑物横井小楠が大に經世實學を鼓吹してから藩論一變した。福井藩の三岡八郎（元名石五郎、後由利公正と改む）江戸長崎の物資集散貿易運輸の状況を視察して、長崎には越前藏屋敷を建て、和蘭商館と越前特産品を特約し、長崎江戸町に屋號福井屋を創立し、又藩の重役を説伏して文久二年に産物賣買會所、明治元年に物産總會所を設けて資産ある商人を元締役として大に養蠶を奨励し、生糸・醬油・茶・麻等の輸出の途を開いた。府中藩にあつては安政六年翁及松村友松等藩命にて長崎に赴き、西南諸道の商況を視察して大に發明するところがあり、歸來領主に復命して國產輸出の急務を説き、府中制産役所を興し藩士和田敬之助を奉行とし、翁は松村友松・山本怡僊等と共に元締役を命ぜられて、大に蚊帳・打刃物類の輸出を企てた。安政六年七月二十三日附、制産役所から鍛冶屋共への申渡書に

此度産物御端立に付打物西國筋へ御運送相成候に付追々注文被_レ仰付_二候間精々逢_二吟味_一打立御指支不_二相成_一之様可_レ致事

又慶應二年八月制産役所から改め申渡五ヶ條の規定（大意）に

- 一 出荷の際焼印可_二申請_一事
- 一 取極賣値段書組々より連名可_二相達_一事
- 一 鑑札なき者打立不_二相成_一事
- 一 他所鍛冶職仲間入免札受くるときは地と同様之事
- 一 毎年三月十五日鑑札改之事

とあるから、當時役所の奨励監督の一斑が判る。

翁は又福井藩の産物賣買會所・物産總會所の役員ともなつて横井小楠・三岡八郎等と殖産事業に勵精したる爲、藩内の景氣漸次好轉し、庶民職業を得て歡呼するやうになり、さきに役人の商法など、反對した藩の重役や道學先生もこれには敬服したといふ。由利公正傳に據ると、安政六年頃

府中の商人松井耕雪來福し、呂主本多丹波（富）の實父閑翁（昌）の依頼なりとて、金五拾兩借用し度しと云ふ、其故は縁族岩倉卿今度岩倉山の麓に幽閉せられて無心せられしが、恥かしながら五拾兩を調へ難し、何卒長谷部氏（名惣連、通稱甚平、福井藩勤定奉行維新後岐阜縣令）に頼み呉れよとの事なり。長谷部も私に計らふことを憚り、丹波より家老に談ぜしめて直に調達したり。此事ありて始めて本多家の財政困難なるを知り、石五郎（後の由利公正）は長谷部と謀り、耕雪に其意を通じ歳末に至り金千兩を貸與して改革をなさしめ、同時に産業を勧め、福井と共に通商を盛ならしめ、數年ならずして大に富むことを得しめたり。

府中藩の財政難も本藩の救助と翁等の物産奨励で漸次好轉するやうになつた。翁は斯くの如く福井及府中の物産奨励に盡瘁された功績は多大であるが、惜しいかな、幕末勿々の事業で、吾人は其資料に接せず、遺憾ながら稿を異日に改めねばならぬ。

翁の異才は夙に松平春嶽公に認められ、又横井小楠・三岡八郎等とも親しく來往して維新前後の實業界に活躍すること數年であつたが、乾坤一轉して王政復古となり、翁は明治二年元石巻縣知事山中靜逸の紹介で、岩倉右府に國家經濟策を獻ぜられたといふが、今其文書が不明である。明治四年に廢藩置縣となり、翁は足羽縣中屬から敦賀縣權大屬（戸籍課長）となつて、福井に敦賀に寓居して數年間置縣當初の公務に執掌し、同九年八月敦賀縣廢止と共に官界を退き、同十年春上洛、京都府に出仕し

て府史編輯を囑託され、同十三年一月辭任し、同十四年十二月から鳩居堂別業に隱棲し、此より専ら文墨を以て自ら娛まれた、時年六十有三。

安政五年十二月七日翁（時年四十）福井にて横井小楠（時年五十）に初對面、同十五日小楠府中に来り翁に面晤、同六年正月二十三日翁出發、長崎視察の途次熊本に歸國中の小楠を訪ひ五月四日歸國、同月十九日小楠福井に赴くの途次再び府中に来り翁に面晤した、兩人の交遊想ふべし。翁が長崎行日記は、今所在不明で、遺憾ながら茲に參考できない。

六翁晩年の交遊

翁は少壯から漢學の造詣が深く、詩畫を善くし、書畫の鑒識に長じ、又善く名士と交り、勞を厭はず人の斡旋をされた。特に京洛に隱棲後は四方教を乞ふ者、詩文の應酬・書畫の鑒識・裝幀や、文人の紹介又揮毫などを依頼する者が漸次多くなり、晩年の翁は全く墨場の盟主、風月の主人として其名京洛に鳴つたことは、翁が多年几帳面に保存して置かれた敦賀縣在職頃からの書簡數百通（全部でない、散佚したものがある）と、翁が嗣子專之助へ與へられた書簡數十通を一閱すると、此邊の消息が窺はれる。今左に翁が前後交遊された名士と詩歌書簡數篇を擧ぐ、但しこれは編者が一覽した翁の遺稿・書簡其他にて名字を發見したもので、誤脱なきを保證し難し。

名士

京都

詩人	江馬 天江	遠山 雲如	大沼 枕山	岡本 黃石	福原 周峯
	山田 永年	山中 信天翁	宇田 栗園	伊勢 小湊	陳 曼壽
儒者	市村 水香	草場 船山	石津 灌園	林 雙橋	片山 精堂
	賴 支峯	神山 鳳陽	菊池 三溪	谷 如意	
心學者	柴田 游翁		歌人	蓮 月尼	
官吏	國重 正文	榎村 正直			
畫家	行徳 玉江	村田 香谷	前田 暢堂		

香墨商

鳩居堂主人

大坂

詩人 廣瀬 旭莊

大垣

政治 小原 鐵心

熊本

政治 横井 小楠

宇和島

儒者 森 余山

福井

藩主 松平春嶽公

政治 中根雪江 由利公正 村田氏壽 毛受鹿之助 松平正直

鴻雪爪 長谷部恕連

豪商 山口清香 片山平三郎

歌人 橘曙覽

篆刻家 佐藤硯湖

官吏 堤正誼

儒者 富田鷗波 山本木齋

大野

政治 内山隆佐 吉田拙藏

武生

産業 松村友松 山本怡僊

儒者 谷口蕉陰

醫伯 前田松閣

鯖江

儒者 青柳柳塘

書簡

翁から專之助へ

田中屋歸國一筆申越候、此度別紙廣告摺物廿枚差送申候、是は文面之通星巖翁追福之會本年十一月十二日決定に付隨分賑敷相催度之旨、舊門人其外知己共に協力致事へ、其地にて誰ふ共一枚宛、本保河野氏又は鯖江其外何方へ成共配り方可然取計可被下候。且又福井片山氏へ此内十枚斗此趣申度幸便之節送り被下度候、若入用ならば又々送り可申候云々。

九月廿九日

專之助殿

父より

此度幸便に付山陽翁

三字額 外に宮原・頼兩翁
保證書 二枚

又東湖額 外に山中信天翁
保證書 一枚

べ五枚一卷にして古箱入

右今便關へ頼差送候條無事着之節入手可被下候。

一此度松村友松兄之爲遺物、菰翁山水幅贈致に付、別紙禮狀一通差入置候、尙よろしく口上を演へ此書狀持參可致候様頼入候。

右之外は昨日郵便を以返事申越候間別段不返事、爲其草々不具

三月十九日

父より

專之助殿

又 追 書

松井清三郎より、枳餅澤山黒のり一袋贈吳、別而枳餅ハ至而好物之品にて大に喜候段厚ク禮ヲ申述被下候。過日より法律書毎度申來候へ共、當地大坂共未ダ書林ニ無之、其外之書も何品ガ當時宜敷哉不心得候間、是ハ齋藤修一郎子ハ卒業學生ニ候へハ此人へ依頼狀相添米倉方へ送り方ヲ頼候方可然ナリ。當地ハ當家へ向ケ送りても宜候、此段清三郎へ申談可然取計致し遣し被下候。

彌平より毎々味噌ヲ送吳、兼而味噌好ニ而別而喜候、此度之味噌ハ菊之製法之由、能ク出來候、日々賞翫候也。

七兵衛より干栗壹袋黒のり壹袋送吳是も毎度之深情宜申入可被下候。

作助より見事之蟹送り吳、直ニ賞翫致度、食指動キ候へ共、專之助過日取急キ出京、俄ニ山中先生方へ參候事故、土産物不持候故、乍殘念此度專之助より之名目ニ而山中氏へ送り候也。作助へハ宜敷禮ヲ申入可被下候。

三ッ井御隠居へ過日之潤筆雲丹一箱正受取、近日差送り可申候。
右夫々宜敷申述可被下候。

三月四日

父より

專之助殿

他から翁へ

橘 曙 覽

福井正玄家に生る、初名は尙事、母は府中山本平三郎の女、夙に鈴門の田中大秀に従學して國典を研究し、敬神尊王の念篤く、和歌は萬葉體に倣うて別に一機軸を出し、慶應四年八月二十八日歿した、享年五十七。

府中の松井耕雪が、大きな黒木もてつくりたるひをけくれけるを、膝のへにすゑあき、肱もたせ頬づゑつきて朝夕の友とす。

撫やまぬ火桶のいろにならひもてみがきをゆかむうたの上をも

よそありきしつゝ歸ればさびしげになりてひをけのすわりをる哉
旦暮になづる火桶を巖にてつきぬこと葉をちもひめぐらす
見ありきしひるの野山の物がたりひをけにいひて夜を更すかふ

今は三とせ四年もやすぎつらん、松井耕雪がもとにて、書畫どもあまた見たしける中に、高島芙蓉のかきたる不盡山のゑめとまりてほしく思ひけれど、かくともえいはでやみにけるを此ごろわづらひて何ごととたゞ物うくちもはるゝまに／＼に、夜ひる衾ひきかつぎてのみ有ければ、心のうちいよ物さびしくなりもてゆきつゝ、はかなきことゝもいたづらに思ひめぐらさるゝくせふんあやにくふるにつけ、ある夜ねざめにふと此ふじの畫にはかに見まほしうふりけるに、よりいとあぢきなくしひたるわざにはあれど、かの繪ゆづりくるべく夜あくるまちて便もとめ、耕雪のもとに其よしいひやりけるに、耕雪すみやかにうべなひて人してもたせおこせたりけり。いひやりはやりつるものゝ、いかゞかへりごとすらんと思ひわづらひてありけるほどふりければ、畫とり出すとひとしく病もふにもうちわすれ、やがて壁にかけさせて、しばしは目もはなたでぞありし。

瘦肩をそびやかしてもほこるか雲ある山を手に入れつとて
見し富士の畫をらごとくはふしはてぬ心の曇り去りぞ盡せる

松平春嶽公

福井藩十六代、名は慶永、天保九年十月二十日襲封、夙に尊王愛國の志を抱き藩屏の重任を竭し、中興の宏猷を賛け、又和漢の典籍に通じ、文雅風藻を能くし、明治二十三年六月二日薨去された、享年六十三。

丁丑四月十六日。扈從老公賞花於嵐峽之下。泛小舟溯大堰水舟中作。

泛得扁舟一棹斜

水廻山轉看無涯

滿眸青靄皆松樹

香雪幾團都是花

敬正

篤

再

拜

見渡せば霞に匂ふ松陰に雪かとまがふ山さくら花

よ

し

永

(松井武助氏藏幅)

昨日者參寓、所有之寶器展閱満足候、此鏢一枚乍輕少、因州鳥取産の由にて、今朝池田慶徳より到來候故及ニ分頒候、笑味候は幸々甚々之至に候、書外可レ期ニ面盡候也、不悉。明治十年四月十八日含雪堂逸人春岳永 啓

耕雪松井老生几下

(松井武助氏藏幅)

薄暑之候、足下動履佳廸、珍重々々、陳者兼而西京滯在中恩借の明清尺牘披閱畢候故、令完納候、以底消長日、加之學問にも相成足下之厚情謝之、書は不盡言、餘悉者佐野久之舌上に付し、別而時下深愛專祈候也。

明治十一年六月五日

春

嶽

松井 篤 足下

明治十年丁丑供奉駐在京師數月矣。余屢謁于旅館。且余所藏之法帖書畫供展覽焉。公携明清尺牘帖而北行。及東歸。托家丁佐野氏而返之。併賜手書。與之良助。今裝潢成。因題畫且記其事。

戊寅八月初七日

翠堂老人 沐手拜書

(三田村良助氏藏)

秋風吹雁黃菊盛開之候、足下愈清寧令賀候、爾後誠に契濶背本意、多罪御海容可給候、足下所有之明清人尺牘、先年予在福井一時一閱、爾後渴望、幸に當度在西京、足下態々武生より被取寄、以底陰消閑日、足下之厚意感謝無限候、今般堤氏歸東之節、被托該尺牘全部被讓、實に至

寶日々閱覽、明清諸先生と相對し、是を師友とするは足下之深情不知所謝候、方今冷氣透肌、自愛是祈、乍末山中先生へも宣傳致希候、高雄之紅楓、嵐山之秋晴嚙かしと想像致候、書は不盡意、艸々不悉。明治丁丑十一月二日於小石川村舎春岳逸人 啓

松井畊雪足下

左長

慶

永

(松井伊助氏藏)

吉田拙藏

大野藩士、名は俊章、字は子明、靜齋と號す、大野丸に乘じ蝦夷に航す、維新後少參事・郡書記に歷任し、明治二十年十一月二十日東京にて歿した、享年六十二、贈從五位。

華帖拜展、梅天鬱々、老臺益御勇健御鞅掌被爲在奉恐賀候。先般御巡廻之砌は寛々得拜晤御高話拜承、誠ニ不存寄佳品拜受被仰付難有仕合不取敢御禮言可申上之處遲緩頗恐怖之至伏而御海怨奉冀候。陳ハ〇〇一條御尋右ハ從來懇意にも有之、御書中之御意味夫トナク私力ニ及ニ探問候處、同人官途ニ意ナキニ非トイヘ共、何分老母恩愛之至情侍養難欠、且兄〇ニ於テ〇義他ヘ奉務スルガ如キ何分再ビ家事ニ關カラザルヲ得ズ等夫ニテ不得止情實有之出仕之處當分先御免ヲ蒙度懇々申出候。(後略)

七月八日（明治七年）

吉田 拙藏印

松井先生 侍史下（敦賀縣在職中）

本多鼎介

府中藩士、名は重喬、表用人・側用人・町奉行となり、維新後敦賀・石川・福井の三縣に歴任し、福井縣會議長となり、明治三十一年一月十四日歿した、享年六十、越前地誌略の著がある。

昨日は緩々拜晤多謝、扱地誌今朝大谷大屬迄差出置候に付參事も一覽有之候處、俄に廢縣之條起り候に付而は、不容易混雜に可有之、從而私地誌等之事は等閑に相成り、數月之困苦も誰れ知る人もなく筐底に葬り、加之心思を勞せし事も尋常雇人之比例を以被扱濟に而は、私の遺憾は勿論、參事と雖ども亦不明に歸するに似たり、依而は一應御話し被下、遺憾不平之なき様に參らず共、殊に慰勞之文に而も有之様御周旋被下度候、併御良策もなく畢竟申丈け下手ならば言はざる方よし、御考可被下候、頓首。

鼎 介

松井先生 御親拆

編者云、地誌は小學校用の越前地誌略、廢縣は明治九年八月二十一日敦賀縣廢止のことを指す。

山中信天翁

三河人、名は獻、字は子文又靜逸、對嵐山房と號し、夙に王事に奔走し、維新後辨事・石卷縣知事となり、後嵐山天龍寺村に住し、明治十八年五月二十五日東京客舎に歿した、享年六十三。耕雪翁と交善し、明治四年翁の三男謙三郎（十一歳）信天翁の養子となる、後故あつて離縁した。

逐日清風益御清適奉賀候、過日不圖御馳走忝奉謝候、名石古瓢拙題甚ダ拙劣御咲政奉願候、小杯清風ニ爲燒候呈上仕御用ヒ被下候は、大喜び奉存候、海苔壹壺仙之助様へ呈上仕度、毎々珍味被下忝奉存候、御序ニよろしく御傳言奉願候、御令聞様によろしく奉願候、萬期ニ拜顔、草々頓首。

六 日

獻

耕雪老契 侍史

谷 如意

彦根藩士、名は鐵臣、字は百鎮、王事に奔走し、維新後大參事・大藏大丞・左院議官等に歴任し、晩に京都に移住し、如意山人と號し、明治三十八年十二月二十六日歿した、享年八十四。

拜誦秋冷之候愈御清健奉賀候、如貴論御互に神交久矣候得共未得拜晤、いづれ不遠御尋可申、水邊御歩行の節御立寄可被下候、御囑の小帖正に入手不日認可申候、爲潤毫一金一封落手奉謝候、餘在拜青之時、頓首。

九月三十日

松井 篤様

谷 鐵 臣

石津灌園

京都儒者、通稱發三郎、字は子節、又名は賢勤、字は士儉、嘗て召されて史館に入り、久しからずして辭して歸京し、帷を下して教授す、明治二十四年八月二十九日歿した、享年四十九。

過日は參堂得_ニ拜晤_ニ奉_レ謝候、陳は豫而御苦勞被_レ下候嵐峽圖、一昨日漸認了候間貴价之幸便に託し一應入_ニ高覽_ニ候、何れ一兩日内升堂之心組に付夫迄御預り被_レ下度候、誠に佛頭之着糞折角之妙畫を塵し候、字畫位置款法共御小言を伺度候、文も實は少々節略仕候也。

先日御話申上候柳里恭一幅先方より借り置候故、態に爲_レ持上候程のものに無_レ之候得共、御慰迄に一併入_ニ貴覽_ニ候、是も前品と一緒に御預り置被_レ下候、取急草々頓首。

廿四日

翠堂先生 研北

發 拜

江馬天江

近江人、名は正人又聖欽、字は永弼、星巖門に入り詩を以て名あり、明治元年徴士を以て太政官に史官に任ぜらる、官を罷めて京都に寓し儒學を以て生徒に教授し、明治三十四年三月八日歿した、享年七十七。

拜誦、其後は以外之御疎濶御海恕可_レ被_レ下候、扱小幀認物被_レ命承知仕候草々塗鴉可_レ仕候、御丁寧に金一封御贈被_レ下難_レ有候、萬期_ニ拜晤_ニ、頓首。

江 馬

松居 詞臺 拜復

昨夕荷香(前田氏)より傳言有_レ之候に付申上候、今日午後勿々西林寺に而避暑旁一戰に及度由申來候、御出掛に松井翁御同伴に候は、僕は神山(鳳陽)相誘可_レ申候、餘期_ニ拜晤_ニ、頓首。

廿六日

江 馬

大山老臺

堤 正 誼

福井藩士、幼名市五郎、藩政に參與し、維新後權大參事・侍從・宮内權大書記官・内匠頭兼調度局長・御料局長官・宮内次官・宮中顧問官等に歷任し、男爵を授けられ、大正十年七月十九日薨去、享年八十八、特旨を以て正二位に敘せられた。

拜啓仕候、一昨夜は御出被_レ下奉_ニ萬謝_ニ候、昨日は登岳、言語同斷實に困苦を極め申候、乍_レ併大風

雨叡山行は容易難出來、後來之珍話と可相成同行一笑仕候。扱茶山先生之軸之義は段々御配慮何とも恐悚之至に御座候、只今は不存寄難得御品種々御投與被成下難有奉拜謝候、歸京之上早々表装可仕自今相樂み候、今晚は小生何も用事も無之候間、若し御閑隙に候はゞ御出被下様奉待上候、御出被下候はゞ御珍藏之桃源之卷其餘御珍ら敷拜見仕度、取急き貴報迄早々拜具。

十月十九日

正

誼

松井先生 拜答

富田厚積

福井藩儒、名は久孫、字は美卿、鴨波・痢虎山人・四縣逸士の號あり、福井藩明道館教授・明新中學校長等に歴任し、明治四十年四月三十日歿した、享年七十二。

謹啓春禧萬福、爾來ハ意外御疎濶相過候、(中略)別冊拙作之如キ景況ニ而歲月ヲ消費候、御笑評又手ハ別冊詩文拙稿筆奴勞ニ代ル爲メ、應用達ノ印刷氏ニ命ジ候次第ニ而、無御遠慮御批評相願度、且ハ曾而芳名傳承致居候灌園石津君へ御交際之義ニ御座候ハゞ、何卒老臺ノ御紹介ヲ以テ御批評之上一度御遞送被下度候。却說今般本縣官員大澤敬之氏御府へ出仕被仰付上京ニ付幸便一書拜呈仕候、該氏ハ循良ナル先生ニ御座候、爾來相伺候ハゞ御應接之程宜御取計可被下候。錦地ハ追追

花柳之候ニ相向遊杖可無閑、不堪渴想候、小生も當度ノ休暇ニハ是非遊度心組ニ御座候、萬期後鯉候、草々不宣。

辱知

厚

積

拜

耕雪老丈 梧右

前田松閣

府中本多侯典醫前田松庵の男、少時藩塾立教館に學び、後長崎に赴き蘭法を修め、父に従うて京都に移住し、京都療病院院長兼醫學校長となり、明治四十一年五月一日歿した、享年六十五、長男松苗醫學博士、次男松韻工學博士。

拜見仕候、過日も御妨仕候、陳は書物之儀色々御高配相懸難有奉謝候。扱隨園詩話も早速御取調被下候而爲御持被下、是亦奉謝候、御噂之通板面之模様不鮮明且補遺も離物に相成候回致せば先生御所持之様ナル品有之候節求度奉存候間、乍御面倒様此分は御返却奉希候、萬期芝、草々頓首。

二月七日

閣

翠堂先生 侍史

村田氏壽

福井藩士、字は子慎、初名已三郎、文峰又齋堂と號す、夙に松平春嶽公の信任を受けて藩政に參與し、維新後福井藩權大參事・福井縣參事・敦賀縣參事・岐阜縣權令・内務大丞兼警保頭等に歴任し、明治三十二年五月八日歿した、享年七十九。

(前略)陳は先般江守權大屬歸縣之節、貴下御珍藏之陳逸舟畫山水小幅御無心申上候處、速に御聽納被下、過日山田へ御托御送被下御懇情不淺次第深く欣忝感謝之至奉存候、居常掲壁樂しみ罷在候、閑暇には書畫草花を樂しみ又は圍碁之慰み致候、御縣下も頗流行と申事に而貴下は頗高手との御囑承り申候、山田權令も致候由、並に永嚴寺等折々御出會と想像罷在候、(中略)當境も過日政府初各省も定額金を減省し、冗官の沙汰有之、官吏肅然之光景に候、近年漸く官員增多丁重之弊有之、今般之御改正は至極可賀之至に御座候、併一時之改正は易く歲月持久實効を得るは頗難事、今般之事は必一日之事に不_レ相成_二様希望罷在候。(後略)

九月念五

(敦賀縣權大屬)

松井老兄 梧右

(内務大丞)
氏

壽

山本木齋

福井藩儒、名は居敬、字は公簡、通稱平太郎、明道館教授・師範學校教諭等に歴任し、明治二十九年十二月三日歿した、享年七十五。

長至前三日。過_二耕雪羽上寓居_一。

交情澹處自忘_レ形 好趁_二幽期過_二竹亭_一 殘日映_レ山晴雪白 疎鐘度_レ水暮烟青
架頭幅集名人蹟 盆裏梅含德者馨 目福一時消未_レ盡 倪黃品罷又憑_レ欄

山本竹雲・松井翠堂兩翁之舊知雅伯設_二追薦筵于三秀園_一。余亦往奠有_レ感作。時戊子小雪薄命傷_二翁死_二客途_一 招魂和_レ淚奠_二生芻_一 記曾爲_レ我忍_レ寒寫 一幅冬天欲_レ雪圖 竹雲翁曾爲_レ余摹_二梅道人畫_一 平生嗜好唯書畫 世味塵情渾淡然 玉軸錦裝何處散 畸人名蹟共雲烟 冬雲欲_レ雪圖一幅。今猶藏。

杉田鵜山

越前坂井郡鵜村波寄人、名は定一、道雅上人・松井耕雪・吉田東篁に従學し、夙に自由民權を鼓吹し、衆議院議員・同正副議長・北海道長官・貴族院議員となり、昭和四年三月二十三日歿した、享年七十九。

月夜訪_二松井先生寓樓_一

返照映_レ江江映_レ樓 蘆花如_レ雪落_二漁舟_一 風過林外殆將斷 月在_二波間_一更不_レ流
絃響籠_レ烟欲_二心惑_一 笛聲渡_レ水使_二人愁_一 遙思故友關山外 今夜吟_レ詩何處洲

又

月出_二諸山_一影入_レ城 江頭樓閣捲_レ簾明 秋生玉露客魂冷 風拂金波鷗夢驚
船入_二蒼烟_一幽聽_レ櫓 橋籠_二香靄_一只看_レ灯 誰知此際幽人樂 飽食_二清光_一到_二五更_一

又

詩酒悠悠弄畫船 青山倒影鏡中天 金波漾動鴛鴦夢 玉笛吹醒漁父眠
蘆岸風過花落水 江樓宴罷月沈烟 露華滿袖秋清絕 心穢洗來身欲仙

正

杉 定 一 再拜

(松井伊助氏藏)

七翁の作品

翁は平生社交上贈答の品目・氏名・月日まで一々手簿に控て置かれたと見え、明治十四年の第五號、同十五年の第六號の分が現存してゐるし、又各地來翰の封筒に一々入手・回答の日時を記してあるし、又藏書目錄の如き嘉永六年から慶應四年までの十六ヶ年間、一々買入の書名・値段を記してあるし、又日記を怠らなかつたといふ位、几帳面の性質であつたから、是を以て翁が少壯からの詩文を推すも、其稿本が必ず整理されてあつたに相違なからうが、惜しいかな、現存するものは明治十一年から同十八年までの八ヶ年間、京洛隱棲中の自筆稿本七卷(松井伊助氏藏)のみで其全貌を觀られぬ。今此七卷を通計すると、漢詩は五絶三十八首・五律三十三首計七十一首・七絶三百七十三首・七律二十五首・七古一首計三百九十九首、總計四百七十首と漢文十六篇ある。編者は隨讀隨鈔して漢詩百首・

漢文六篇を本書の附録とした。

漢詩は大沼枕山の牛耳を執つた耐久社の月並課題が尤も多い。當時の社中には市村水香・伊勢小湊・國重半山・福原周峯・神山鳳陽・江馬天江等の名流があり、翁の初稿は大沼枕山・岡本黃石・菊池三溪・石津灌園・宇田栗園・陳曼壽諸老が評點を加へてゐる。稿本には咏史十八首・咏物七十八首、いづれも典雅雄渾朗々吟誦するに足る、全體を通じて敍景の作が尤も多く又尤も優れてゐると思ふ。翁は繪事を弄ばれたから、其敍景の作も悉く間適飄逸、人を誘引して烟霞泉石の別乾坤に逍遙せしむる感があり、いくら讀んでも肩の凝らぬところに、翁其人の溫平玉の如き人格が現はれてゐる。翁が晩年山水明媚の京洛に卜居して書畫に圍碁に名士を對手としての生活環境は實に詩的である、有聲の畫である、翁の詩の大半は翁晩年の生活其儘である。

翁は維新前上落して勤王者達と來往して機密にも參與されたことがあるやうに聞いてゐたが、當年の日記・書簡類が不明なので、此邊の消息は一切闕焉せねばならぬ。今全詩四百七十首を通觀しても、極めて平靜溫雅な心境、風月の主人公としての翁を髣髴するのみで、些かの慷慨激越の口吻もなく、其述懷・書懷の諸作にも所謂詩人の氣焰感想もないのは不思議の事、もし異日資料を得ば稿を改めねばならぬと思ふ。

漢文は僅々十六篇、畫卷の題跋の如き小品文が多く、主として石津灌園が雌黃を加へてゐる。翁の文

はこれを詩に比すると少々和習があつて、詩とは大分見劣りするが、翁の造詣が用典・句法の間にも現はれてゐるところは敬服に堪へない。

翁は舊府中の富家に生長し、家庭の裕福から自然祖先傳來の書畫骨董に親しみ、知らず識らずの間に鑒識眼を具し、又別墅逍遙園を設けて名士と交游し、晩年京洛の別業寸碧樓に隱棲されてからは、詩人畫伯等との來往一層頻繁となり、自ら畫筆を弄して山水花卉を描寫し往々其遺墨を珍藏する者がある。就中武生の三田村良助家藏の小畫帖一卷の如きは、明治十年頃、翁が同氏の爲揮毫された小品で、去大正十三年十一月八日、皇太子殿下福井市行啓の際台覽を賜はつたことがある。書畫については全く門外漢の吾人が、翁の書を觀ても、筆致清逸風骨自ら高く、畫も亦淡々着筆南宗の風味掬すべく、其小品の如き「空山無_レ人水流花開」の風趣がある。

翁は平生詩人や畫家を以て自ら標榜する人でないが、詩畫は翁の趣味に尤も好適の課業であつた。吾人は翁の受業門人でない、又一たびも翁の譬喩に接したこともないが、漫に贅辭を呈して翁を詩人や畫家として取扱ひたくない。しかし今殘存してゐる片々たる資料を通じて、翁一代の閱歷を大觀すると、翁は建學に殖産に藏書に文墨に、藤垣城下の町人中稀觀の偉人であつて、其流風餘韻が後代を感化して已まぬことを確信し、其作品に對しても敬意を表する一人である。

八翁の落款

翁は平素詩畫に耽り、晩年京洛に隱栖後は全く雲烟飛動中に閑日月を送られたので、其使用された落款は凡百數十顆あり、自らも篆刻されたやうだ。それは翁の歿後悉く散佚して其所在不詳であるが、幸に其印譜二卷・刻印帖一卷（松井伊助氏藏）が現存してゐるので、其大概を窺ふことができる。今私見を以て左記の如く之を分類し、翁が遺墨鑒賞者の參考に供することにした。但し篆字不明の分は姑く之を省き、又印影は製版の都合上、印刷の陰陽、輪廓の方圓を區分せず、文字の大小配列は悉く活字にて之を示し、又彫刻者は刻印帖にある左記十五人の姓名雅號の各頭字を落款の下に記して置いた。

立

齋

頼綱、山陽の姪、京都人

櫟堂老人

安部井晉門、篆刻家、京都に住す

頼齋道人

僊嘯三雲孝

三雲宗孝、篆刻家

可亭信

羽倉可亭、名は良信、稻荷祠官

玩古堂大島克造

山中獻

字は靜逸、信天翁と號す。京都に住す。

秋水高橋正

玉江釣人貫

行徳玉江、名は貫、詩畫を善くす、浪華人。

孚

石齋

佐藤誠

硯湖・尙古齋・彫蟲居等の號あり、福井藩士。

麥塘

松居

文園逸人

姓名字印

松井
篤印

五顆の内
立・賴松

字目
子行

立・賴

字
子行

可

子
子行

三顆の内
櫟

一顆琥珀材
子行

山・松

父子行

松

牙印
篤松

源篤
印

奔雪

篤印
山

正
賴

松井
氏 僊

松篤
印

號印

石蘭

石蘭齋

芋栗

芋栗
山人

二顆竹章
可・立
耕雪 櫟・賴

耕雪
櫟・立

木章

耕雪
賴

木印

雙峯
處士 玩

耕雪
書畫

蘆山
樵隱 立

堂號印

籬廬山下
讀書堂

玩

碧雲

碧云

碧云洞
秋 玩 櫟

晚翠堂

二顆の内
麥

翠堂

逍遙

山

逍遙園

二顆の内
麥

逍遙
立

逍遙
亭

可

耕雪齋

立・玩

雙齋

佐

東玉
莊

延翠

佐

我堂曰晚
翠在籬廬
雙峯之頭

收藏印

石蘭齋
圖書部

松井氏
圖書部

櫟

耕雪齋
清玩姑記 玩

併印

子行

篤印

翠堂

篤印

逍遙園主

篤

子行

耕雪

雙

峰

臣印

篤臣

篤臣

書束印

付之
一笑

二顆

報
平安

副啓

印以
爲信

引首印(關防印・成句印)

蕉聽窓
雨聲

寶楚

銅章
善維

顚

乾坤一虛舟

雲煙
過處

丹心答
聖明

樂夫天命
復奚疑

運用之妙
存乎一心

園栗收
芋全貧

煮茗
燒香

蘭佩

竹外
一枝

夜々青山
入夢來

虛室白
吉祥止

顚

耕讀

白髮
三千丈

隱居
放言

心地遠
自地偏

光風
霽月

山氣日
夕佳

浮生間
半日

澹泊
寧靜

如坐
春風
玉

美人
香草

白石文
清泉

北松
魚

塵海浮沈

九日驅馳一日閑

太古小年

玉

讀書
僊

仁者得
其壽

紅翠
磨麻

聊娛
佐

對青山
依綠水
佐

水晶印
松藹
松

水精章
雲心
顚

雞冠石印
臥游
櫟

孔雀石材
游無朕
松

檳榔子印
晴好
雨奇
櫟

孔雀石
樂志
玉

如水
彫

碧雲
翰墨

象形印

松葉に
竹馬
松

九翁についての追懷談

一

故農商務次官 齋藤修一郎

松井耕雪翁は如何なる人だ。此人は藩の武士ではないが、帶刀御免の町人である。武生の物産の第一なる鎌・出刃庖丁・菜切庖丁類の問屋の主人であつた。若くして親を失ひ家督相續をした、此時財産は十萬兩もあつたといふ素晴らしい大盡であつた。相續の際人に語つて「我れ生れ得て人となり常に學問を愛好す、願くは我が家産の全部を擧げて此武生藩の學事に致さん、此れ我が一生の願望なり。」と云つた。實に此れは立派な言葉であつて、學問の爲に財産全部を擲つといふことは到底尋常一様の人間の能く爲し得ることでない、而して耕雪翁は遂に其言の如く立派に家産を學事に投じてしまつて自己の素志を遂げられたのである。

耕雪翁は商家の出であるけれども、武生も及ばぬ立派な人格の人であつた。學は博く百家の書に涉り、才は和漢を通じ、見識もあり才能もあつた。殊に書畫骨董の鑒識に長け、家は名だゝる富豪の事であるからして、珍器妙品數限りもなかつた。それ等を幼少の折から目を透して優れたる逸品の出來際を能く味つて居るからして、自然に鑒識に長ずるやうになつたのであらうと思ふ。耕雪翁は京都の名家

鳩居堂主人と書畫骨董の鑒識から交りを訂して同家にある無數の珍寶を鑒定された人である。

耕雪翁は斯の如く才藝に秀で、居た人であるが、また見聞も實に廣かつた。京都は勿論のこと、江戸長崎其他日本全國足跡至らざるなく、諸藩の名士と交り、詩文を戦はし風流に遊び、誠に好箇の學者であつた。で福井藩春嶽公の知遇を受け、又彼の九州の麒麟兒と稱せられたる横井小楠先生の教を受け朱子學の舊套を脱し、陽明派新思想に入つて研鑽する所中々深かつた。而して常に其志は武生藩の學事の旺盛に心を注ぎ、また一面には理財上にも意を用ひ、藩の財政を豊にせん爲に、遠く長崎あたり迄も歩を運び、物産の双物類の販路を擴張して、ちさ／＼席の暖かなるを知らぬ位であつた。

其他學校を新築してこれを藩主に獻じ、書籍を寄附し、貧家の子弟の學に志し難きものには資を與へて學ばしめ、別莊を幽邃の地に卜してこれを藩公に納め、天下の諸賢士を引見するの所とし、遊歴の文士武人を款待するの場となし、隣地に「逍遙亭」と號する自己の別莊を別に建築して諸藩の人材を招き、留つて遊ばんとするものには意の儘に任せ、一藩の子弟に薰陶を與へしむるなど、其篤實謹行の徳普く四方に知らるゝに至つた。

斯様の有様なれば武生藩は勃然として文武の道啓け、越前一國は愚か、北陸一道はいふに足らず、實に日本六十餘州に武生藩あるを知らしめたのである。此れ全く上に名君あり、下に良家老あり、また民間此耕雪翁あるが爲にして、誠に天下に誇るべき一事であつた。(齋藤修一郎先生懷舊談)

一一

故衆議院議長 杉 田 定 一

松井は武生の町人で、鎌を商うてゐたが、學問が出来て、殊に理財に長じ、經綸のある人であつたから、武士の子弟も皆松井の門人となつた。關義臣や齋藤修一郎の如きは、皆武生の生れであつた。松井は政治の才も十分にあつたが、商賣の道にも長じて居つた、所謂士魂商才の人であつた。明治になつては太政官に出て大に働いた。福井に總會所が出来た時には、之が長となつて殖産勸業に努めた、殊に桑や茶などを奨励して盛に植ゑしめた。藩には固よりそんな餘計な金はないので、松井はどしどし藩札を作つて之を運用せしめた。その時の藩札は赤い紙であつたので、赤札——と呼んでゐた。松井は盛にこの赤札を濫發しては、桑や茶の苗木を植附けしめた。そこで一部に強硬な反對論が起つた。「さういふ不換紙幣の濫發をやつては、藩の財政の破綻となる」といふのが反對論の要點であつた。すると松井は平氣なもので、「成る程現金のないところに、矢鱈に紙幣を發行して苗木を買入れるのであるから、一應は不換紙幣とも見られるが、藩札に相當する苗木がちゃんと生長し、それが幾年かの後には、段々實收を擧げて来るやうになり、更に非常な利益を産み出すことは必然である。して見れば、これは決して不換紙幣でも何んでもない。紙幣を作つて、之を消耗品に使つてしまふから不換紙幣となるので、この紙幣を以て産業が出来れば、不換紙幣どころか立派な兌換券ではないか、これを

不換紙幣などいふやうな、そんな根性の小さいことではいかぬ、もつと膽を大きくし實際を見なければ仕事は出来ない。」といつて、たう／＼反對論を叩きつけてしまつたなどは、松井の面目躍如たるものがある。一例ではあるが、まづざつとこんな風な人柄であつた。父の仙十郎翁も、この會所に於て松井と一緒に働いてゐた。松井は鎌の商ひをしながら、傍ら私塾を開いて子弟の教育をした。自分が耕雪の門に入つたのは十六の年で、そのころ先生は四十餘であつた、自分はこゝでは主として資治通鑑を教はつた。松井の門から出た齋藤修一郎・關義臣・渡邊洪基など、皆有爲の人材となつた。齋藤は非常な秀才で、大學南校に入つたが、一夜百首の詩ぐらゐは平氣で作つて、同學の士を驚嘆させたものである。明治六年十月、開成學校の開校式があつた際には、明治大帝の御前に出て天顏に咫尺して講演をする名譽に浴した。外務省に勤めて公使館參事官になり農商務次官となつたこともある。明治四十三年五月四十六を以て死んだのは惜しいことをした。關義臣は松井の門を出て聖堂に學び、最も漢文に巧みであつた、氣慨があり、頗る逸話に富んでゐる。渡邊洪基は漢學ばかりでなく、西洋學をも修め、東京に出て慶應義塾に學び、それから官界に入つて、元老院議官になり、東京府知事・東京帝國大學總長をも勤めた。又特命全權公使にもなり、宮中に入つて錦鷄間祇候にも歴任し、出世をした方である。自分は元來理財は下手であつたから、どちらかといへば、道雅上人（三國瀧谷寺第四十三世住職）及吉田東篁（福井藩儒）の感化を受ける方が多かつたやうに思ふ云々。（杉田鶴山翁）

三

敦賀町醫師 島 房 男

(前略) 拙者は主として先生の京都隠棲時代、明治十年より同十三年の四ヶ年間師事したる關係上、先生の奥様其他より聞込みたること、自ら目撃せしことも多少有之候も、御參考までに秃筆を呵して此に記述仕候云々。

一 先生の勉學 先生は十四五歳にして家督相續せられたり、讀書を好まれて屢々父母の叱責に逢はれたる爲、常に倉中にて米をふみながら窓の明りにて竊かに讀書をつゞけられし由。

二 先生の陰德 天保? いくつかの饑饉の歳、令夫人の裝飾品其他の不用品を人知れず賣却して得たる資を米穀に代へられ、其幾升かづゝを袋に詰め荷車に積み、店員をして深夜に之を引き出し、町中(武生)を引き廻りて赤貧者と目ざす家の窓より表口より其米袋を投入れて逃げ去された、それが何人の慈善的行爲か永く町民に判明せず、一時は非常の評判なりしも、先生は沈黙して一言も語らず、又家人にも語らしめざりしとのことなり。又京都在住中にも毎朝先生の宅前を通過する老人の羅宇しかへ、五六歳の幼兒を伴ひて弱り果てたる聲に、ラウー仕替と呼び歩く態度に、惻隱の情を動かされたものか、彼れ老人が一二町先生の宅を遠ざかつた頃を見計つて、十錢二十錢を老人に與へて家人を逃げ歸らせたことがある。

三 先生の沈勇 武生在住の頃本宅の裏の離座敷? に住はれた、一夜抜刀の強盜押入りて先生の枕邊

に大刀を疊につき刺し聲を出すとブチ切るぞと威嚇し、例の如く有金残らず渡せと逼つた。先生はそれを見て徐ろに床に坐わり煙草一ぷく吸うた後、應へていふ有金は全部望み通り渡してやらう、併し遺憾なことにはブザカヒ後で金は多くない、又假りに金を渡すにしても汝の必要に逼つた使途も質さず渡しては、余として心中忤怩たるものがある、此場合其理由を披瀝せよと命ぜられた、其態度餘程嚴肅沈着で其威に打たれたものか、強盜は立位から坐位に移つた、そして琴平詣りをしたい爲と滑稽にも事實を吐いた、先生一笑自ら立つて金庫(當時の)の引出しより全部の金(當時十圓ほど在りしといふ)を渡された、強盜は之れをひつたくる如く逃げて、最初の勢もなく何れかへ消え去つた。(先生の令夫人の直話)

四 先生の寛容 一日私は先生の愛藏せらるゝ陶器を携へて先生の命ぜらるゝ儘に、或る袋物職人の住所を訪れて其袋を注文した。歸途過つて途中に取り墜してそれをうちわつたのである。私は全く蒼くなつた、先生の叱責を恐怖して實家に遁ぎ歸らうか、或は此儘自殺しようかなど子供心に無分別にも考へた、そのとき私は十四歳であつた、併し出來事は京都市中の眞唯中であり、其頃の私の自宅は天津であり、逃げ歸るにも自殺にも實は容易でなく全く當惑したが、一度謝罪して見ようと氣附いて、歸宅後恐るゝ先生の前に出で事實を告白してひたすら粗忽を詫び容赦を希つた、すると先生の容貌が一時サツト變つたが、亦忽ち以前の溫顔に返つてニコ／＼しながら私を慰めて心配

に及ばぬ、今後注意なさいと言はれて、私は全く生き返つた心地がした、當時の私の當惑して恐縮した心持、先生から赦されて嬉しかつた心持は七十歳の今日でもまだ忘れられぬ。

五 先生の實地教育 先生は佐田介石のランプ亡國論を私に聴くべく私の請ひを許された、私は演説のある知恩院の廣間に駆けつけた、そして介石の演説を歸宅後先生に話した所が、先生はそれは介石の説は間違つてゐる、全く頑迷固陋の説だと最初一撃を加へて後諄々と私に説かれた、曰く自宅の空地に桑苗を植ゑても一家にて行ふ養蠶には事足りるのだ、日本人が協力して働いたらランプや石油位は製造も出來れば石油坑の發見も可能だ、それに頑迷にもランプを使ふな石油を種油に代へよなど、消極的な鎖國的演説をして行脚するとは何事ぞ、昔は楚人が弓を落して知らぬ顔で行き過ぎた、後から弓の落ちたことを注意したら、楚人の落した弓を楚人が拾つたら損得はない、貴下に進ずると言つてサツサと去つて了つたといふ昔話がある、苟も日本人たるものは他國の品の輸入を拒んで、自國品のみに満足してゐるなどは狭量だモット大量でありたいと私に教へられた、私は此話を想起して先生が今日經濟封鎖に夢中になつてゐる諸外國に痛罵を浴せてゐられたかにも思はれてならぬ。

六 先生の廉潔 山中信天翁（靜逸）は先生の親戚であつた、當時京都嵐山の對岸對嵐房に住せられしが、明治十二三年頃は信天翁の書畫珍重せられて、揮毫依頼者殺到に困じ果てた。翁は或る程度

の潤筆料を徴收せられた、其事を聴取られた耕雪先生大に憂ひて、自ら嵐山に赴き翁の盛名の傷くことに就て非常に苦諫せられたことがある。

七 敦賀縣の同僚 耕雪先生は舊敦賀縣時代には權大屬にして戶籍課長を務めらる。當時の越前出身者として徳山繁樹（福井、聽訟課長）高谷光雄（勸業課長）江守愿（福井）本多鼎介（武生）等の入あり。權令は山田武甫（後の熊本國權黨の首領）、參事兼裁判所長寺島直（後の大審院評定官）權參事相馬朔郎（舊小濱藩士にして伏見戦争に於て幕府方として勇名を馳せし人）等ありしが、何れの人も皆耕雪先生に向つて深く敬意を拂つて居られた。

八 京洛の交遊 敦賀縣廢止後は京都に移住して蛸藥師堺町に隱遁せられしと雖、交際頗る廣く、時の文人墨客以外政治家及商賈とも交あり、就中時の京都府の粹知事榎村正直・大書記官國重正文（後の社寺局長）伊勢小湊・石津灌園・市村水香・草場船山・江馬天江等と屢々往來せられた。先生は毎年鱸・蟹をワザ便を以て國元より運ばしめ、是等の人々に贈られたが、一日余は鱸と蟹を榎村知事に贈るべく使ひせしに、知事は即詠として一首の狂歌

煮たらいに、焼いたらいにたらと蟹

煮たら焼いたらにうまから

禮狀中に認められしことを記憶してゐる。先生は耐久社と稱する詩會を組織せられ、毎月一回何れ

かの（當番ありて所を定めず）場所に吟詠を樂まれた。

九 一等當選 又或るとき東本願寺にアマチユアの書畫展覽會ありて先生も又出品せられた。（尺五墨で松圖、統地と記憶す）、然るに先生は一等に當選したとて喜ばれたことがある、此畫何人の手に渡りしか詳かでない。

京都府御用掛として數月間出勤（當時の府廳は二條城）せられしが間もなく辭任せられた。

一〇 春嶽公の來訪 一回松平春嶽公訪問せられしことがある、余は折悪しく不在中で拜顔でできなかったが、其後隱宅二階の應接間には春嶽公の筆

寸 碧 樓

と書したる扁額を掲げられた。蓋し階上からは東山三十六峯寸碧を現はしてゐる爲、春嶽公が斯く名けられしと當時先生の直話であつた。

一一 先生の激勵 余の家もと赤貧である、先生滋賀縣の知人に依頼せられ、考試に及第せしを以て同縣の醫學校に貸費生として入學せしめられた。然るに幸にも縣費留學生として東京に向ふとき安積良齋の扇子一本を贈られ、良齋の經歷を直話して懇々余を戒められ、左の一詩を贈られた。

明治十四年九月。送下島房男子奉縣命入學於大學校。醉後賦以代贈言。

不_レ求_二富貴_一不_レ憂_二貧_一 羅綺紅裙見_二傲塵_一 辛苦十年如_二一日_一 男兒成業在_二精神_一

一二 先生の日常生活 先生は二三杯の酒を飲まれたが、酒客にあらず、來客のとき以外杯を手にならず、寧ろ甘きものを好まれた。先生に芋栗と稱する別號がある、滅多に使用せられず、芋と栗

とを非常に嗜まれる結果斯く名けられたもので、京都隱棲中は屢々當時の料理店柵屋に芋と栗のきんとんを注文して嗜食せられた。京都に於ては主として翠堂と稱へられ、耕雪とは更に落款せられなんだ。非常に勤儉であつたが、客を遇することは極めて厚かつた。又常に衛生に注意せられ、就寢起床時間正確で眼力を失はざる方法なりとて毎朝必ず梅干を食せられた。

一三 先生の趣味 書畫骨董には趣味深かつたが、床頭を飾るものは常に學者若くは知人の書畫多く、高價の書畫は決して弄ばれず、余を戒めて書畫を弄ぶべからずと常に言はれた。又多くの盆栽を愛せられた。（昭和九年七月稿）

四

武生町長 土 生 彰

「海内文章落_二布衣_一」と詩人が唄ひし如く、幕末の支配階級たる武士は概して文事にくらく所謂素町人・土百姓のうちには却つて書史に通じ經術を窮め風流韻事を解するものが多かつた。

武生の鉅商松井耕雪翁の如きも亦其の一人にして、經史に通じ詩畫を善くし四方の名流大家と交遊して徵逐應酬夙に才名を馳せ、安政年間には邑主本多侯に黄金三百兩を獻して學校を建てんことを請ひ、

更に別業を邑の東南に營みて逍遙園と名づけ、齋藤拙堂に囑して記文を撰せしめ、淺野蔣潭は「東南奇勝」の匾額を揮毫し、森余山・松本晚翠・土生友山などの諸氏を會して詩を賦し興を遣り大に一郷の文化を鼓吹し、維新前福井藩が熊本の横井小楠を聘し、殖産興業を奨励して藩の財政を立て直さんとするや、藩主松平春嶽公に拔擢せられ松村友松等と共に其事に參畫し、頗る經濟の手腕を露はし、維新後は敦賀縣の大屬として吏才を露はし、晩年官を辭し京都の山水風物を愛して移住隱栖し優游自適の生活を送られた。

余の笈を負ふて京都に入り叔父前田松閣の家に寓するや、翁は余の爲に束脩を支辨し拉して石津灌園先生の門に入らしめ、其後病の爲に通學を懈るや、翁は灌園先生の手簡を携へ來りて余に示し、灌園先生が「土生生詩文の才あり廢學惜むべし、老兄宜しく諭して入塾せしめられたし。」と申し越されたから、少々の病氣は力めて入塾すべしと懇諭され、遂に余を携へて筭疑塾に同行せらるゝなど、其の親切殆んど骨肉に對するが如くなりしは余の牢記して忘るゝ能はざる所にして、其懇篤真率なる風貌は今尙ほ目睫の間に在るを覺ゆると共に、往年郷黨の爲に學校を建て人才を養成せんと努められしは、決して名譽心の爲でなく實に好學の真情より出でしものなるを知り、轉た景仰の念を催すのである。

維新前後我が輩爾たる一小邑武生より渡邊洪基・關義臣・齋藤修一郎・高木太郎八・佐藤正克などの人材を輩出し、尋で松本源太郎・土肥慶藏などの後起の雋を見るに至りしも、要するに翁が獻金建學、

大に文教を鼓吹したる結果にして、余の如き驚才も亦一枝の筆を以て口を糊し得たるも、その流風餘韻の然らしむる所と深く／＼感謝して措かざる所である。

五

元京都府立第一高女教諭 平 山 政 道

一

先生の京都御在住は明治十年春より同十八年五月御逝去までの間で、その間は主に風流韻事に優游として閑日月を弄ばれたものと存ぜらる。私はその間の最後三年餘先生に親炙せしものにて先生の往復せられし名士儒家の先輩も承知致し居り候。

先生は大沼枕山先生の牛耳を執られし耐久詩社に加盟せられ、その當時の詩人名流に交際せられ詩酒徵逐せられしものと存ぜられ候。

頼 支 峰 先生 江馬 天江 先生 谷 鐵 臣 先生 神山 鳳陽 先生

市村 水香 先生 桂 雙 橋 先生 片山 精堂 先生 山中 信天翁 先生

などが其主なるものに候。又先生は圍碁を嗜まれ(餘り強くはなかつた)、常に相往來し居られ候、其碁友には前記諸先生の中

江馬・神山・片山先生の外に當時名流の畫家村田香谷先生・前田荷香先生などにて更闢に及ぶことは

常のことに候。

二

又書畫骨董を愛玩せられ、往々骨董商の家に至り意に適するものは之を購求して歸られ愛玩數日に涉ることあり、書畫の揮毫も時々興に乗じて執筆せらる、それは重に郷里よりの依頼品にてありしかと思はる、京都の方には餘りに御遺作を見受け申さず、小生も御依頼いたし置きしが、御逝去の年に認め贈られしが、惜しむべし前年杉津浦の松井さく様（僊之助妻）の懇望せられし故、同氏に寄贈して今は手許に何物を留めず、只習畫の手本にとて認められし四君子・皴法などが數葉あるのみ。

三

鳩居堂の別房に移られしは十五年頃かと思はる、其頃より鳩居堂の前主人と交際せられしも、常に風流談のみの様に思はる（或は別に何かありしかを知るべからず）、當主人はその時に漸く幼稚園通ひの小兒ゆゑに何事も承知せられず、遺作等は何もなき様に話され候。

尙先生の略歴を記せし碑は、當事本能寺墓域中に建設せられ、その當時熊谷鳩居堂氏の斡旋にて拓本數葉をとり、郷里のさる方へも贈られし様に記憶致し候。小生は其恵に與らず故に拓本は所持致さず候、その文面によれば京都在住中優游自適せられたのみの様に候。

四

先生御逝去の後は僊之助様が諸事を取纏められしが、僊之助様は二十年の昔和歌山にて客死せられ、其後を舍弟八十四郎君が處理せられしが、君も十數年前に病歿せらる。その時小生はその反古の整理に參りしが史料となるべきものを認めず、日記様の物少々と印材一顆（特に愛用のもの）軸物二三を紙屑屋の手より小生買求め候。日記様の物と軸物とを杉津浦の松井さく様に大切に御保存を願ひますと御渡し致しました。御愛用の印材を手許に所持致し候。

五

京都御在住の太要は右の如くですが、唯一つ公職に従事せられしかと思はるゝは、かの碑文中に

丁丑春至_レ京。其十月傭_二仕京都府_一。編輯府史。庚辰一月以_レ病辭_レ傭云々。

とあり、これが即ちその一つかと存ぜられます。御手紙中の太秦の某寺にて會合のことを一向に承知致さず、或は維新直前に先生は西游して長崎まで至られしことを聞き及びしが、其途次に京都に足を留められし頃にあるしことにはこれなきか、この一事は不知のことに候。

因に先生が京都に御在住中往來せられし名家は、今は殆んど其人なく、又その子孫さへも詳ならねば尋ねるものなく、何をいうても五十年の昔のこと、小生とても臆白上りの小僧の時代のことゆゑ記憶も確かならず、思出の儘に書記せしゆゑ、何等の資料ともならぬ雞肋なれども御尋ねにまかせ御答へまで。（昭和九年七月稿）

附 祭 文

明治廿二年三月、農商務大臣秘書官齋藤修一郎氏武生ニ歸展シ、其第廿二日ヲトシ大ニ故舊ヲ龍泉寺ニ會シ以テ其亡師松井耕雪翁ノ冥福ヲ修ス、蓋シ近世風俗頹壞德義地ヲ掃ヒ、復タ師弟ノ道ノ何物タルヲ知ラズ、獨リ我が修一郎氏ハ幼時薰陶ノ恩ヲ護レズ能ク其亡師ニ禮ス、是レ豈希觀ノ事ニ非ズヤ、意フニ氏ヲシテ其亡師ニ禮アラシムルモノハ固ヨリ氏ノ至性ニ出ヅルト雖モ、抑モ亦翁ガ功德人ヲ感孚スルノ致ス所ナリ。翁ハ儒雅風流邊幅ヲ修セズ、加フルニ經世ノ才アリ、先君富恭公ニ上書シテ庠序ヲ立ツルカ如キ、故横井平四郎ト謀リ我武生ノ特有產物タル利器ヲ中國ニ輸出シ以テ其販路ヲ擴メシガ如キ、皆武生ニ偉績アリ、修一郎氏ヲシテ其禮ヲ厚クシテ冥福ヲ修セシムル所以ノモノ亦以アルナリ。副元既ニ修一郎氏ノ禮アルヲ嘉シ、又耕雪翁ノ能ク之ヲ致ス所以ノモノニ感シ、聊カ燕辭ヲ陳ベ以テ祭詞トナス。

明治廿二年三月廿二日

從五位男爵 本 多 副 元

同

于茲明治廿二年三月廿二日、龍泉精舍ニ於テ齋藤修一郎清酌庶羞ノ奠ヲ供シ、謹テ先師耕雪先生松井篤君ノ靈ニ告グ。竊ニ思フ人生ノ成育邦家ノ經綸ニ於テ殖產興業ト教育訓導ノ二者ヨリ必要ナルモノ

未曾有ナリ。先生夙ニ之ニ見アリ、天下未レ化、武族統御ノ權ヲ專ニスルノ時ニ當テ、身商ニ在ルト雖モ、郷里ノ產業開ケズ教學衰墜スルヲ憂ヘ、新ニ疊舍ヲ建築シテ之ヲ領主ニ奉リ以テ子弟就學ノ門ヲ開キ、廣ク書籍ヲ購求シ子弟ヲシテ肆ニ之ヲ閱讀セシメ、福井本藩ノ執政ト謀リ興業殖產ノ策ヲ立テ、遂ニ領主ノ政府ヲシテ制產所ヲ起シ物產ノ販路ヲ遠ク中國九州ニ求メシム、而シテ時運轉移、事業遂ニ中道ニシテ廢セリト雖モ、衰墜ノ藩政ヲ一時保續シタルハ、專ラ先生ノ功勳ナラザルナシ。今日郷里ノ人ノ内ニ在テ邦家公衆ノ爲ニ計畫斡旋スル處ノモノ、先生ノ薰陶ニ依ルモノ許多ナリトス。嗚呼、先生ノ功勳ノ光ハ唯郷里ヲ照スノミナラズ、其影ハ遠ク日本全州ニ互リ、其反射ハ一倍ノ光輝ヲ郷里ニ向テ注射スルモノニシテ、吾輩其光輝ノ内ニ在テ生育スルモノ、豈ニ先生功勳ノ大ナルヲ欽望シ深ク之ヲ謝セザランコトヲ得ンヤ。吾輩若シ先生ノ心ヲ以テ其心トシ、先生ノ遺訓ヲ以テ務トセバ、一身ノ成育邦家ノ經綸ニ於テ將ニ洪益多福アラズンバアルベカラズ、況ンヤ今 天子聖明吾ニ與フルニ憲典ヲ以テシ、吾ニ賜フニ參政ノ權ヲ以テセラル、誠ニ以テ千歲ノ一時各人勤勉誓テ此國ニ報ズルノ秋ニシテ、先生ノ爲シタル處ノモノハ今ハ吾輩ノ責任ニシテ避クベカラズ逃ルベカラザルノ職分トス。先生ノ忠誠周到懇切鄭寧ノ靈、希ハ吾輩子弟ヲ訓導スル恰モ生前ニ於テスル如ク、先生ノ志ヲ以テ吾輩ノ胸中ニ注入シ、先生ノ遺訓ヲ奉ジ忠實以テ皇家邦國ニ盡スコトヲ得セシメヨ。若夫先生身ヲ修ムル清淨廉潔、起居溫和、喜怒面ニ現ハレズ、訓導曾テ倦ザル等ノ如キハ、吾輩子弟ノ均シク知ルト

明治廿二年三月廿二日

齋藤修一郎再拜

一〇、耕雪翁年譜

領主	副	昌
年 代	文 政 二	同 一 二
三月十三日越前國府中（今武生）大黒町に生る	九月二十五日八世實父六右衛門歿す享年四十	正月九日七世祖父六右衛門歿す享年八十 六月二十六日繼父六右衛門歿す享年三十九 八月五日「一世變心決定」の誓書（十三葉）を認む
四月二十一日實母歿す享年四十九	四月二十一日實母歿す享年四十九	四月二十・二十一の兩日先考二十七回忌先妣十三回忌法會を行ふ 九月二十五日先考正當忌日に誓詞あり
私財三百兩を獻じて藩養立教館を建設す	三 八	三 七
後藏書を藩ニ獻納す	今蓬萊區西側	先々寶曆十二年嘉永五年兩度大火に罹る

副		恭		富	
同 九	同 五	同 四	同 三	同 二	明治 元
八月二十一日敦賀縣廢止につき退官す	敦賀縣權大屬に任ず	二月二十九日福井元産物會所御用宅へ轉居届出足羽縣中屬に任ず	九月福井藩大屬に任ず	八月七日武生暴動福井藩關係の故を以て松井家も襲撃に逢ふ	岩倉右府に謁し國家經濟策を獻ず
同 五	同 四	同 三	同 二	同 一	同 五
五月十九日家督を男仙之助(年十二)に譲り隠居して耕雪と號す	十二月七日福井にて横井小楠に初對面す同十五日小楠府中に來り耕雪に面晤す	正月二十三日田發横井小楠を熊本に訪ひ長崎を視察して五月四日歸國す	同十九日小楠福井に赴く途次府中にて耕雪に面晤す	七月福井藩製産係世話を命ぜらる	三月二日大野藩内山隆佐府中に投宿し耕雪襲應す四月二十七日府中にて耕雪に面晤す十一月十一日耕雪宅に止宿す福井藩實買會所元締役・府中制産役所元締役を命ぜらる十二月別墅追遙閣竣工す
伊豫國吉田藩儒者森余山を藩塾立教館教授に推舉す	府中町役所總代に擢でらる	五月八日上洛六月十三日歸宅す	大垣藩老小原鐵心追遙閣に遊ぶ五言古四十二句あり	正月十二日福井藩命にて上洛三月十三日歸國す	森余山府中を去る
同 二	同 一	同 四	同 三	同 二	同 一
上京記あり	上京記あり	四四	四五	五〇	五一
府中制産役所設立	四二	四一	四〇	五三	五四
敦賀打它辨次郎方又莊	敦賀縣權大屬に任ず	七月十四日廢藩置縣	五月十四日廢藩置縣	五月十四日廢藩置縣	五月十四日廢藩置縣

恭	副	元									
		同 一〇	同 一三	同 一四	同 一八	同 一九	同 二一	同 二二	同 二三	同 二四	同 二六
昭和九	大正一三	春京都に下居す十月京都府史編輯を囑託せらる 四月十六日松平春嶽公に陪し花を嵐山に賞す同十七日公來寓書畫を展覧 す同十八日公の禮狀に接す 一月退官す	十二月十八日鳩居堂別業に移居す	五月十二日鳩居堂別業に歿す享年六十七同十五日本能寺に葬る法號本有 院耕雪日篤居士	一月三十日妻八木氏歿す享年六十四武生久成寺に葬る法號貞室院妙篤日 耕大姉	十一月二十四日福井三秀園にて山本竹雲・松井翠堂兩翁の追薦建を行ふ	三月二十二日門人齋藤修一郎等武生龍泉寺にて祭典を行ふ	五月十二日生地碑を武生龍泉寺境内に建設す渡邊洪基題字本多鼎介撰文 撰文	五月嗣子仙之助先考墓を京都本能寺に建設す男爵本多副元篆額石津灌園 撰文	六月十一日近藤兆平・山内庄右衛門・松井彌平發起となり武生龍泉寺に て追善會を行ふ	十一月八日皇太子殿下福井市行啓の節遺墨畫帖台覽あらせられたり
		五九	六二	六三	六七				耕雪松井翁碑	耕雪松井君墓銘	建學記念碑

松井耕雪翁傳終

耕雪翁詩文鈔

耕雪翁遺稿現存七卷。起明治戊寅歲。訖同乙酉歲。文凡十六篇。詩凡四百七十首。戊寅已前之作。未詳其存否也。今茲昭和甲戌歲五月。當翁五十年忌辰。父老胥謀欲建碑作傳以顯彰其遺德。予乃以作傳之故。更鈔錄其文六篇詩百首。附諸傳後。若夫枕山・湖山・黃石・灌園・三溪諸老評點則今一切略焉。

後學 石橋重吉 識

〔漢詩〕

明治戊寅集

戊寅四月十三日。耐久社友嵐山觀櫻宿旗亭。十四日歸寓。

分韻得十首。節二

烟雨漸收麗水光。隔溪花影媚斜陽。幽人覓句媒杯酒。風送霏紅片々香。

翠滴花浮春雨餘 野橋涵影月升初 何當買得數弓地 山水佳邊結草廬
題算盤圖 應人需

計利謀功一世終 不知吝雨與慳風 欲令身後無遺算 應向冥冥問碧翁
茉莉花 限韻

一盆靈種伴書床 玉骨青衣淡不粧 欲識古人評品確 纔繙花史映先香
咏史 武田信玄

進如風雨止如丘 戰略當年罕匹儔 莫怪終身避論語 豺狼亦合自知羞
同 北條早雲

赤手圖天下 窮途亦變通 恩須懷父老 智已攬英雄 一虎吞關左
三鱗躍海東 八州群草木 無不偃威風

河橋逐涼 限韻

浴罷把筇獨出家 橋頭涼月照汀沙 開襟小立垂楊下 冉冉莎風散露華
寒塘小景 限韻

寒塘風物老 漠々水煙銜 衰柳梳蓬髮 敗荷裁敝衫 棲禽爭獨木
歸艇信孤帆 立杖低回久 夕陽沈遠嶠

咏史 加藤肥州

勢如風雨逞雄豪 蹂躪雞林入不毛 立馬海邊遙決眦 旭光昇處富峯高
同 豐 太閤

風馳電掃撼坤乾 得失興亡共忽焉 誰料當年捧鞋手 握來六十六州權
蘭

伍得群芳驕色無 深山幽谷寄清軀 春風底事不吹住 放散芬芳入九衢
竹

勁節虛心標格齊 敢辭寒素日凄々 晨風夜雨都無事 占得平安一畝棲
梅

瓊林皎々玉姿埋 只有幽香特地佳 殘夜雪晴山吐月 一枝清影傍空階
菊

郊原秋老衆芳摧 獨向茲間得意開 晚節傲霜見其勇 一花能殿百花來
美人春睡

掃了雙蛾倚碧亭 滿簾花影夢魂馨 婉容若使三郎見 應道紅棠睡未醒
咏史 上杉謙信

雄略英圖驚鬼神 八州蹂躪馬蹄塵 兩軍相對爭衡日 却運海鹽資甲民
同 毛利元就

懸軍伸大義 無敵向鋒鏖 二道英雄服 一朝兇賊亡 家風能撫士
庭訓事尊王 壞亂紛々際 天恩賜菊章

同 前田利家

丹衷一片久留芳 溫厚移風君子光 曾集豐家恩顧士 講究論語托孤章
戊寅十一月 奠橘曙覽大人十年祭

憶君終死志勤王 不觀如今皇運昌 幾向墳前揮老淚 絕絃早已十星霜
謝石津灌園君惠金桂一枝

嘉貺桂花一朵芳 知君割愛剪秋光 寒齋頓富黃金粟 研北研南三日香

同 己卯集

己卯新年書懷

輕官宛似水雲身 難奈當年誤混塵 寄跡山林宜避笑 委形市陌却爲顰
半缸燈影纔除歲 一朵梅香又遇春 碌々低垂羞鬢雪 任他明治太平民

春曉 耐久社課題 齊韻

曹騰夢裡聽晨雞 曙色蒼々入綺闥 滿地落花人未起 一痕殘月畫樓西
紅白梅花盛開 耐久社詩會席上 得支韻

樓前紅白玉梅枝 馥郁香清分外奇 憶得坡翁西子句 淡粧濃抹兩相宜
題自畫忠孝兩全圖

諼草依堂背 葵花向太陽 寄言世臣子 莫愧此雙芳

咏史 柴田勝家

就封南越治尤隆 政蹟至今猶不空 誰知興亡皆有數 莫將陷敗失豐功
己卯春日。周峯先生見似移居雜吟五首。

因次高韵以寄賀之。節一

窓外幽光畫不如 半篙春水此移居 雨凭文几晴漁艇 風月一竿書五車
宇治萬碧樓上分字得巖

一灣綠水似開函 三面環樓萬碧巖 呼覺黑甜鄉裏夢 天風沸々入涼衫
賀三田村竹水古稀 越前武生人

高齡七十益堅剛 百福並臻業既昌 況復兒孫多膝下 可稱今世郭汾陽
牽牛花

秋風到籬落 含笑一朝々 柔蔓本無力 才垂竹尾嬌

秋曉 課題

月落曉天星斗高 西風淅々動蓬蒿 暗知泣露滴蟬翼 梧葉深邊乍一號

秋蝶 課題

狂舞曾和黃鳥歌 秋風一到奈衰何 欲飛粉翅無微力 猶傍槿花籬落過

松 耐久社課題限韻

鬱々蒼々瑞靄含 嚴霜積雪力能堪 羅浮仙子渭川客 併作歲寒良友三
竹

机邊盆竹好相伴 硯北移來至硯南 盡日繙書何所讀 虛心貞節對君慙
梅

縱橫散策雪中探 林裏更無舊舊含 忽有隣翁來報道 春風早已到江南
歲晚書事

歲晚僑居無客來 衡門不鎖任風開 囊中阿堵分將去 妻買香芹我買梅

同 庚辰集

新年有作 耐久社宿題二首各限韻

老去多空過 歲新寒益嚴 瓶梅薰紙帳 窓月上湘簾 煮茗頻添炭
思詩數捻髯 興來時試筆 揮灑一霜縑 喜見昇平象 曉天瑞靄絨
門旗描旭日 寶牕舉春帆 賀客投名刺 髻兒更茜衫 餽羊猶未去
萬戶屠蘇銜

題富嶽圖 同上

獨衝雲霧立蒼穹 萬岳千山盡鞠躬 八朶削成神代雪 旭光相映白玲瓏
畫馬同上

大宛龍種性姿雄 豈與尋常駘駑同 設色精神真赤電 通靈首足定追風
曾聞枯骨千金價 今見丹青一幅工 爲怕飛騰奔軼勢 繫將長在畫圖中
筆

陳玄一自遇陶泓 千歲親交不背盟 二友若無毛穎子 因何得接楮先生

桃山懷古

豐公當日國爲家 玉殿金樓極侈奢 眼界茫茫無一字 春風發遍萬梅花

題月瀨梅溪圖

梅外無他樹 幽芳互吐吞 春風香世界 夜月玉乾坤 山勢穿雲峙
溪流觸石喧 花埋三十里 隱見一村々

畫猿

連臂嘯明月 空山秋已酣 到邊霜果熟 何必限朝三

畫羊

曾被初平叱 今爲高士裘 何時拜封爵 呼做管城侯

畫犬

眠毯飽梁肉 應憂狡兔殫 何如食糟粕 夜々守門安

題自畫山水圖

麥秋時節雨窓寒 一炷香消午夢殘 喚取奚童磨墨去 寫來胸裏百峯巒

聽秧雞

夜來聲剝啄 疑是客敲門 起捲湘簾去 僅籬月一痕

畫鼠

晝伏而宵見 似尋竊盜盟 貓兒一顧視 厨下寂無聲

消夏吟

碧花香底蜂王鬧 修竹陰中棋子閑 浴後登樓多快意 晚風新月水東山
無奈老軀多懶眠 半簾槐影夕陽天 炎塵一掃無些子 把水晶瓶插白蓮

畫牛

隴頭耕罷眠芳草 狎昵村童甘受咎 牧籴聲々何所處 一犁春雨夕陽遲
文繡爲衣芻菽餐 廟廊何似草茵安 請看魏紫姚黃外 別有劉家黑牡丹
題僧西行與銀貓於群兒圖 戲擬高適詠史體

尙有銀貓贈 應憐布衲寒 不知塵外士 猶作老兵看

畫蛇

掉舌盤身毒焰紅 常潛大澤又深叢 素尊截斷護神劍 內府生擒鎮帝宮
埋却兩頭陰報德 添來四足巧無功 人間別有能書客 學樣飛騰欲究工

山本怡僊計至

生別已來經十年 參商相隔思悽然 何圖頃日捨吾逝 空望波濤萬里天
哭松村友松

歲市逢雪

一封計至淚爲痕 無奈焚香不返魂 北望悵然空獨立 陰雲漠々月黃昏
百貨街頭燦可觀 人語紛喧歲將闌 盆花架上俄逢雪 故把梅枝仔細看

歲晚書懷

隱居人事少 不識世間喧 案上書三帙 座隅梅一盆 偷兒無着眼
窮鬼欲窺門 今歲又將暮 徒增雪鬢繁

同 辛巳集

辛巳新年作

紅街紫陌揭華旌 戶々旭章照眼明 滿市兒童遊戲好 東風先送紙鳶聲
新 柳

東風一夜入郊垌 先試新妝映畫屏 曳玉舞腰看裊娜 含金醉眼帶微青
鞭絲帽影淺深水 馬語鈴聲短長亭 黃鳥投梭織將去 千條萬縷自爲經
山田永年詞宗。近獲故齋藤拙堂翁遺物鐵研一枚。

因作鐵研歌見示。乃次韻奉和。

文人之需莫若硯 硯之爲用在詞翰 千古大業惟文章 必借片石發爛絢
鐵研學人日磨墨 剡藤吳絹日拂拭 海內共推學人文 何知此硯出機軸
散髮道人遊勢還 一硯排置翰墨間 云是學人所鍾愛 鐵研猶在几案班
道人獲之呼快絕 從此尙友心愈切 作歌志喜詡吾人 我亦賡和不避拙
君不見道人磨硯硯磨道人 不磷之堅志似鐵硯之鐵

次福原周峯新居雜咏韵 節一

幽趣輞川墅 交情蔡子齋 湘簾春雨靜 石枕晚風偕 塵土無牽夢
青山有入懷 先生何宿福 獨得好生涯

杏花春雨

霏々春雨細於絲 簾外杏花三兩枝 髣髴佳人新出浴 滿身香汗濕胭脂
題利休像 耐久社課題

仙靈何用比廬同 茶味寓於禪味中 不啻當年茶博士 子孫傳世襲清風
題芭蕉翁像 同上

簡淡如同老子風 纔過四十世稱翁 一家真意豈花月 寄在池蛙活潑中

同 壬午集

新年對雨 耐久社席上

鴨東樹色雨紛々 點滴繞檐琴筑間 共喜新年初會友 一壺春酒細論文

咏鶴 華頂吟社席上題分「字得」松

乘軒又何妨 似受大夫封 天上長鳴響 雲間盤舞容 孤山林氏伴
蜀道趙公從 延壽互求侶 卜棲在碧松

惺窩先生 耐久社課題

辭辟遐蹤妹背隈 白雲深處避紅埃 群儒輩出唱朱學 總自先生門下來

羅山先生 同上

當世儒宗大樹師 洛閩家學子孫貽 風雲際會非人力 天出斯人偃武時

題桃源圖

仙凡纔是異區寰 洞裏乾坤日月閑 一自漁郎溯溪口 桃花消息到人間

圓山觀花 耐久社席上題分得「春字」

紅杏白櫻隨序新 鴨東無處不芳塵 人生百歲情如夢 伴蝶隨鶯日弄春

聞子規有感

六旬歲月付微醺 宛似廬生一炊欣 自古功名眞畫餅 人間富貴是浮雲
元來石火光中者 畢竟蝸牛角上群 殘夢膏騰天未曙 子規啼過枕邊聞
下保津溪舟中作

每臨險處膽先寒 應勝嚴陵七里灘 舟子執篙舷上立 支將亂石下危湍
伊藤仁齋先生

脫與儒衣劫賊羞 烟花滿眼未登樓 生涯唯有「一家學」 不換人間萬戶侯

題柳陰待渡圖

沿岸垂楊雨後青 千條萬縷舞瓏玲 待舟渡口低回久 沙鳥雙々過暮汀
子規 華頂吟社課題

題鳩居堂別業

紅塵十丈隔簾帷 山色入窓秋更宜 日伴虛心栽竹塢 常觀活潑養魚池
半庭苔蘚牛毛石 舊砌槿花甕眼籬 別有端檐清韻在 紗籠露冷月鈴兒

歲晚小集

忘年此會又忘貧 耐久樓頭談笑親 三百六旬看欲盡 今宵醉味已逢春

同 癸未集

元旦牡丹

天香國色壓梅魁 旭日初昇蕊已開 何料今朝迎貴客 花王青帝一時來

新年雜咏

又見春風度世間 十年辜負舊孱顏 梅花香裡閑眠處 一夢蒼騰繞故山

咏硯 耐久社課題

本是端州萬石君 久留人世有功勳 陳玄兔穎皆良友 協力傳來千古文

咏筆 同上

五色生花皆夢中 得心應手豈求工 遠傳青史千年事 多是毛公與有力

咏紙 同上

閑窓信筆寫幽情 漫費剡溪雪白清 今日絕無太冲賦 洛陽低價楮先生

春江曉渡圖

日欲昇時水靄加 柳陰呼渡立平沙 料知昨夜山中雨 春漲溶溶泛落花

題忠孝圖 贈山添蠖軒子

寫竹類蘆蘭似葱 蜀葵萱艸至花窮 笑吾拘法難移改 不若蠖軒塗抹工

晚春書懷 耐久社課題

三月看將盡 空過愧鬢毛 花飛黃鳥老 山碧杜鵑號 幽興敲棋子

春愁付濁醪 不關塵世事 閑坐讀離騷

初夏田家

青山雨罷杜鵑過 處々薰風長綠莎 原上耕牛猶未返 一堤楊柳夕陽多

方廣寺大佛

浪費黃金幾萬千 造成巨像禱安全 英雄末路多癡事 恰似秦皇老好僊

送國重半山君赴任富山縣 六月十五日送別宴席上詩

馬蹄遙赴立山雲 三疊離歌酒正醺 一別參商且吾老 不知何處再逢君

三樹坡卽目

逶迤堤上柳條長 簾外薰風脉々香 如意四明峯斷續 滿樓幽賞坐斜陽

知恩院

華頂山頭絕俗埃 梵宮蕭寂倚崔嵬 洪鐘埋在萬櫻裏 撞破爛霞香靄來

冬宵獨坐

悲鴻髣髴酒初醒 傾耳聲々不可聽 寒夜山房無坐客 眼青相對一燈青

同 甲申集

梅影

萬斛香浮春未闌 牆頭磨出月團々 孤山處士臨苔岸 姑射仙眞倚畫欄

疎密分明池水淹 橫斜濃淡夜窓寒 不須揮灑傳神訣 充得天然粉本看

甲申仲秋 伊勢氏宅小集 同神山・江馬・賴諸先生飲。

席上分韵得明字。

一樽又對舊同盟 其奈微雲遮月明 巖桂芳醴難辨影 池魚潑刺只聞聲
醉中題句皆堪賞 燈下圍棋誰得贏 好有清茶醫酒渴 何妨談笑到殘更

賀山口山曉翁還甲壽

人間幸福莫如壽 積善餘慶得地仙 遙識兒孫圍膝下 捧將壽盞祝華年

同 乙酉集

恭應山階大王教咏竹 奉祝七秩榮壽。

纔解黃金籜 忽爲碧玉林 月明留鳳影 風動聽龍吟 三伏多清爽
四時常綠陰 果然君子操 不改歲寒心

乙酉新年作

歲華逢改曆 梅蕾未知春 詩頌催佳氣 屠酥祝履新 病多宜避俗
交少樂清貧 門巷無塵事 只兼風月親

題蓬萊山圖 應菱渚畫史之需

蓬萊境裏聳仙寰 鬱鬱喬松老鶴還 中有紅顏白眉叟 福如東海壽南山

乙酉春日 祝佐藤正克子舉男兒 聞白晳肥大 英姿過人 乃記

喜 乍寫宜男長壽圖 併題此詩以呈

聞言維岳降靈神 未試啼聲英物真 積善餘慶曾記得 果然天上石麒麟

〔漢文〕

養拙居記

吾鄉草坡金子翁。嘗匾其居以清蘇臺吉水所書養拙二字以自號焉。翁爲人恬淡寡慾。獨酷嗜俳諧歌。技亦甚巧。常吟咏自樂。不知老之將至也。夫翁之巧於俳歌而其樂之如是矣。則宜號以養巧也。顧乃以養拙名焉者何也。夫人之處世。巧者苦。拙者樂。巧者危。拙者安。巧者勞。拙者逸。巧者多言誤身。拙者沈默全終。凡此數者。其得失之相去何如也。翁蓋有見于此。故其名之如此歟。然以余觀之。翁之養拙者。卽其所以巧於養老。不啻俳諧之巧。何也。其有得焉。而未嘗有失焉也。而豈世俗之所謂巧者乎哉。余與翁同庚。爲垂髫竹馬之友。莫逆有年。一旦余出鄉關。荏苒十四年于茲。今尙客寓不歸。送老他鄉。比諸翁之養拙其居。誠有愧且羨焉。去年翁來游西京。枉吾寓。話舊道故。相樂累日。翁屬以其居之記。余既羨翁之巧於

養老。而愧余之拙於自養。能不介然於懷。於是乎記。

明治十四年六月二十七日

山本一鳳子肖像記

嗚呼。是吾亡友一鳳子之肖形也。一鳳子本姓田中氏。父稱四郎兵衛。一鳳子其第三子也。年甫十四。出爲山本某養子。遂冒山本氏。世住越前武生。以製造農具爲業。天保元年九月。養父某病死。一鳳子乃嗣焉。五年八月丁養母艱。哀毀如所生云。一鳳子爲人溫厚好義。嘗讀司馬溫公家訓。至曰不如積陰德於冥々之中爲子孫長久之計。慨然有惠貧賑窮之志。旣而家罹災。資產殆盡。一鳳子日夜勵精營業。後遂復舊。慶應元年。官擢用保甲長。勤勞稱職。邦君嘉之。特賜引見以獎之。當此時。米價驟騰。窮民殆飢饉。一鳳子乃與衆謀。相共捐貲。糴米數千苞。欲賤糴以賑貧窮困。會貨貴米賤。賑窮之謀。初志牴牾。損耗不貲。一鳳子不忍分任之於同謀者。一以身當之。獨力盡償債。於是家產再蕆盡。後深慮子孫生路。憂苦成疾。終不起。時明治四年正月十五日也。享年五十六。葬於鄉之本興寺。嗣子仁平承業。仁平爲人孝順溫雅。每言及先世。未嘗不嗚咽歔歔也。居常勉勵家業。孜孜弗懈。家道日富饒。倍蓰父祖。嗚呼。溫公之訓於是乎益驗矣。而一鳳子亦可

以瞑于黃泉矣。今茲仁平來于余京寓。乞書其顛末以配肖像。其意欲每祭朗讀以慰先靈也。余於一鳳子旣辱友誼。故不辭而爲之記。時明治十四年六月辱友耕雪老人松井篤謹識。

純錫茶心壺匣面題

鳩居堂囑

此純錫木瓜式茶心壺。雖無款識。是必爲明代物。其精巧必係趙昆玉張星瑩輩所造焉。且純錫茗壺者。好事家所爭貯。然至如此器。則希世之品。非尋常玩弄之比。收藏者宜尤珍重也。

明治十五年

跋竹洞翎毛魚蟲譜

鳩居堂囑

古人之論南畫詳矣。有法。有訣。有長。有要。有病。有忌。然概皆主山

水法。間及花卉翎毛。亦約畧言之耳。且寫卉毛者。其用筆用墨之法。如南北一轍。而實則殊塗。自非觀畫譜據畫式者。未能無惑乎其異同也。往時竹洞前輩有慨于此。乃著四君子譜花卉譜等。既行于世。後又撰此譜。取稿本托故鳩居堂主人梓之。當時刻甫成。未及發兌。板罹災而燼。今之堂主人。憾其湮沒。乃繼先志。就舊稿再刊。公世以資益海內學南畫者。余謂此譜一出。庶乎補古人之畧。而無惑乎南北之異同。因爲弁簡端者如此。

明治十五年八月十三日

題河野菱渚畫幅

在梅堂

此原本係圓山應舉所畫。爲某氏珍藏。上坂氏囑南越河野菱渚臨摹。而筆精賦色較之於原本。無些異。若掩疑則不能分別原與摸也。

明治十六年

友松松村君碑

吾亡友友松君諱意正。友松其通稱。本姓內田氏。出嗣松村氏。乃越前附庸本多侯之邑民也。君爲人慷慨。常思盡力藩國。嘗獻策邑主。論蕃殖物產賑恤窮民事。宜邑主嘉其志有所委囑。安政六年春二月。君銜命發邑。自長崎港遂歷西海南海山陽山陰諸道。考驗其物產之多寡運輸之便否製造之巧拙等多所發明。具復命邑主。主乃設立制產役所。命君幹其事。令領內人民擴充素習。大興隆物產。及創內國通融貿易。君乃拮据鞅掌。未嘗一日而懈怠。於是。邑內物產逐年蕃殖。製造之工大改舊觀。邑主賞君功勞賜章服。公許稱苗字及佩雙刀。尋進其班級。世以爲榮。明治元年。福井藩設總會所。欲大開導管民富殖物產。明年直召君命辦其繭絲事務。君以爲宿志可果。於是。銳意勉勵。事漸就緒。衆皆刮目以待其成功。不幸其次年冬。君俄嬰篤疾。乞假歸養鄉里。沈綿臥蓐者殆十年。十三年十一月七日終歿。享壽全五十七年。又一月葬于武生陽願寺內先塋之次。配伊東氏。名美津。生六男二女。長篤三出嗣內田氏宗。次謙太郎。亦嗣內田氏支家。次才吉。是爲

君嗣。次慶次郎。尚幼在家。餘四子女皆夭。既葬之數年。令嗣才吉等兄弟。悲先志之未畢而功勞之或湮沒也。於是。欲別建一碑俾其志業之一端不朽于後。以余與君交最親善。來乞銘。嗚呼。余長於君四歲。余固期託吾身後於君。而余豈忍反銘君碑哉。雖然孝子顯親之志。則又不可得而沮焉。乃攬老淚。強爲之銘。銘曰。

利用厚生 國賴斯人 厥器匪小 其才罕倫 若際昭代 功名更新
今也則亡 志竟不伸 有子紹述 庶克慰神

明治十七年十一月廿二日

耕雪翁詩文鈔終

昭和九年十一月十日印刷
昭和九年十一月十二日發行

〔非賣品〕

著者兼
發行所

福井縣武生町役場内
松井耕雪翁遺德顯彰會

發行所 同

印刷者 島 連太郎

印刷所 三 秀 舍

東京市神田區美土代町二丁目一番地
東京市神田區美土代町二丁目一番地

